

早稲田大学本庄高等学院
2024年度 学校自己評価・関係者評価

2025.3.31
早稲田大学本庄高等学院

注釈：以下の内容については、担当教員が該当項目について記載しているため、多くの箇所で内容の重複する部分がある。

0. 卷頭言

2023年度はまだ、完全に感染に対する不安がなくなったわけではなく、校内の新型コロナ感染拡大により休校措置、第2学年閉鎖、3年生2クラスの学級閉鎖措置をあつたり、インフルエンザを含め、感染拡大に対する注意喚起を何度も行った。2024年度は、国内全土的なインフルエンザの流行が度々報道されたが、本学院では大きな影響もなく、その意味では丸々5年ぶりにコロナ禍以前に戻ったと判断される。

この間、確認できたのはまさに「対面の良さ」であった。コロナ禍がもたらした収穫の1つとして「オンライン」が挙げられるが、対面との比較が一方でなされる形となり、改めて対面の必要性を実感することになった。とはいえ、オンラインは学校業務の様々なところに入り込み、新たな教育・職場形態を生み出している。例えば、従来は近場・短時間の出張でも交通費と時間をかけて出かけなくてはならなかつたものが、オンライン会議により経費削減、時間節約に繋げることができている。逆に海外・宿泊を伴う遠距離の出張でも同様である。授業は対面に戻ったが、質問や諸活動のミーティングなどではLMS上のメッセージ機能やZoomを用いることも普通になった。要は、対面とオンラインの使い分けができるようになったことが、ポストコロナにおける大きな変化といえよう。

以下、このような状況の中で、本庄学院ではどのような教育がなされたかについて述べたい。

1. 教育理念・目的・人材育成像

早稲田大学は早稲田大学教旨に示された3つの建学の理念、すなわち「学問の独立」「学問の活用」「模範国民の造就」に基づき、教育・研究を展開している。その上に、2000年に「21世紀の教育研究グランドデザイン」を発表し、08年には創立125周年を契機に「Waseda Next 125」を策定して「早稲田から WASEDA へ」をスローガンに定めて広く世界で活躍する人材の育成に努め、グローバルユニバーシティを目指すこととした。さらに、創立150周年を展望した「Waseda Vision 150」を12年11月に策定し、「アジアのリーディングユニバーシティ」として世界に貢献する大学であり続けるためのビジョンを社会に公表し、目指す方向性を明らかにし実行している。

早稲田大学本庄高等学院（以下本庄学院と略）は早稲田大学創立100周年を記念して1982年に男子校として開校した。2007年に男女共学となり、2012年に現在の校舎に移転した。全国各地および世界各国から、将来早稲田大学を目指す意欲的な生徒を集め、自由と自立の校風の中「自ら学び、自ら問う」という教育方針のもとで「進取の精神」に満ちた活力ある生徒を育てることを教育の基本としてきた。

加えて、「Waseda Vision 150」に関連し、2012年11月、「本庄高等学院の将来構想」を発表した。すなわち地域の特色を生かした「森に想い土に親しむ」教育をいっそう発展させた、教科横断型の教育・研究活動を通して、社会の各分野で活躍できるリーダーを育成することを目的としている。

本学院は早稲田大学での一貫した教育体系の中に位置づけられ、卒業生全員が早稲田大学の各学部に進学すると規定されている。したがって本学院の目的は、早稲田大学教旨、「Waseda Vision 150」、そして「本庄高等学院の将来構想」に基づいた教育・研究活動を行なうことである。生徒に対しては、知的関心を高め論理的な思考力、豊かな感性を育成し、さらに大学における専門的な学問の分野も模索させ、また大学での幅広い本格的な学問研究に必要な、基本的な学力・体力を養成することを目指している。その目的は本年度においても継承された。

2. 教育活動

2.1 授業

2.1.1 授業運営

本年度は昨年度に比べ、コロナ感染対策による授業への影響はより小さくなつたが、引き続きインフルエンザも含めた感染症対策を行いながら授業運営を行つた。

(ア) 国語

2024 年度も多くの授業で音読（群読）や発表を実施できた。また、PC、iPad、書画カメラ等のデジタル機器を積極的に用いて授業を行つた。

他にも、1 年生の授業では年間 10 冊を目標とした「読書の記録」への取り組みも継続して行つた。

さらに、国語の授業内で生徒に取り組ませた公募作品（大阪経済大学 第 24 回高校生フォーラム 17 歳からのメッセージ）が上位に入賞するなど、めざましい結果を残している。毎年発行している「国語科文集」は主に授業で取り組んだ作文を載せているが、今年度も多くの優れた作品が寄せられた。

(イ) 数学

2024 年度も一年生の春休み明け数学学力テスト・数学 I の一学期中間試験に対して追試・補講を実施した。また、昨年度同様、自学自習 LA の制度を導入し、専任教諭・非常勤講師に加えて大学生による質問対応の時間を設け、手厚いフォローを行なつた。自学自習 LA は対面および Zoom による形で実施し、多くの生徒の利用があつた。

(ウ) 理科

引き続き衛生管理に留意しつつ、取り組みを各科目で充実させた。講義だけでなく、ディスカッション、実験実習、それに伴うレポート作成の方法、添削を行い、発表による生徒のアウトプット技術の向上も図っている。生徒たちが能動的な学習をする環境が醸成されている。

(エ) 地歴公民

「自ら学び、自ら問う」という学習基本方針に従つて、主体的・能動的な学びを促すことを重視する一方、附属校として、常に学部における学びとの結びつきを意識しながら授業を展開した。以下、歴史分野、地理分野、政治・経済分野、公共分野に分けて振り返る。

【歴史分野】

単に出来事の時系列や人物の暗記を求めるのではなく、現代という時代が、過去の長い歴史の展開の結果であることを意識させるよう心がけた。特に現在の動向に関連する歴史的事象についてはそれを強調し、受講生自らが「歴史を学ぶ意義」について考えることができるようになることを目指した。地図・人物・建築物等の写真をはじめとする視覚教材を積極的に用いることによって、受講生の想像力を掻き立て、歴史に対してより親しみを持たせるような工夫も行った。

【地理分野】

既存の高校地理の学習範囲にとらわれず、それまで学んできた他教科での学習内容を可能な限り援用しながら、身の回りの風景や土地利用の成り立ちについて、地理的事象の因果関係を自分の文章で論理的に説明できる能力を養うこと目標とした。また、授業で得た知識が、自分自身の今後の生活における知恵として活かされるような授業を心がけている。

【政治・経済分野】

生徒によるグループワークやディスカッションを取り入れ、主体的・能動的に学ぶ機会を多く設ける努力をした。任意の国際問題について自ら論点を設定して全員で討議する授業を行つたり、現代社会の諸問題について映像資料を活用しながら探究する授業を行つたりした。時事問題を多く取り上げ、ニュースへの関心を高めるよう努めた。

【公共・倫理分野】

受講者に対して、哲学や正義論に関する高度な内容の文献を正確に読み込む訓練を通して、先

人たちが世の中の様々なことがらについていかに骨身を削って真剣に考えてきたのかを知らしめるように努めた。そして、現代に生きるわれわれの務めは、それら先人たちの功績をまず謙虚に受けとめ、それらを参照しながら、最終的には自分の頭で「何がまともなのか」を考え抜くことであるのだということを語った。適宜、グループワークの方法も取り入れて、自分の意見を表明することと他者の意見に耳を傾けることの重要性についても気付かせるように努めた。

(オ) 英語

3年間を通じ、スピーチやプレゼンテーションをはじめ自分の考えを相手に伝える機会を適宜設けている。本年度もマスク着用、手の消毒等など感染防止に努めながら相手に伝える活動を実施した。これにより、生徒の発表の機会の確保することにつながり、パフォーマンス活動の充実を図ることができた。

(カ) 保健体育

保健体育では、保健と体育が繋がっていることを生徒が実感できるよう工夫しながら授業を開いた。

体育では、恵まれた体育施設をフル活用し年間を通じてさまざまな種目に取り組んだ。大久保山を走る持久走は、自然を走る体験になり、生涯スポーツのイメージ作りに有効であった。陸上競技場、野球場、サッカー場、テニスコートが独立して設置されていることから、存分に運動することができ、学びの機会が充実することで技術の習得にもつながった。さまざまなスポーツを通じて、仲間とコミュニケーションをとりながら協力・調整することで相互理解が進んだ。また、「する」だけでなく「みる」「支える」「知る」の観点においても体験することで、生涯スポーツを考える時間として機能したと考える。

保健は「生きる力」とつながる、息の長い科目であることを生徒が実感し、日常生活とつなげることを目標にしてきた。知識の獲得と共にさまざまな題材での仲間との意見交換によって、多面的な意見を知り、自己の思考を深める時間としても有効であった。

(キ) 芸術

芸術科の科目は、対面による教員と生徒・生徒同士のやり取りが行われることで、より活発で充実した授業を展開することができる。授業後のアンケートでも、「一般教科の学習に追われる最中、とても良い息抜きの時間になった」と回答している生徒が多数居り、学院生の充実した日々に寄与できていたことがうかがえる。

音楽Iの授業は、1学期には様々な名曲の歌唱、打楽器アンサンブル、ハンドベル合奏に取り組み、2学期には旋律譜に記されるアルファベット（コード記号）の解読の仕方を細かくレクチャーした上で、グループ活動・演奏発表を行った。各班で選んだ楽曲の一部分を、旋律担当・伴奏担当に分かれて、オリジナルの合奏を行った。クラス内の交流を図る良い機会となった。3学期は、個人・グループによる演奏発表を行った。色とりどりの発表が連続し、個々人の努力の成果も実り、生徒たちも大満足のようであった。

美術Iの授業は、本庄キャンパス内の風景画、陶芸、平面構成、鋳金、将来の自画像、の課題に取り組んだ。美術は、作品制作を通して自身の内面にあるものを表現することで、自己を見つめ直し、新たな気づきを得る機会となる。新しい素材との出会いによる発見や創造の楽しみを味わうことを大切にし、絵画にとどまらず立体表現にも挑戦することで、多様な表現の可能性を探求した。また、ワークシートや鑑賞活動を通じて、言葉や文字で形のないイメージを言語化し、作品を通して対話を深める中で、他者の視点や価値観への理解も深めることができた。こうした経験を通じて、単なる技術の向上にとどまらず、表現の本質を探究する力や、創造の過程における思考の深化、集中力の向上にもつなげることができた。

本庄高等学院は、クラス単位で音楽Iと美術Iを履修している。そのため、グループワークを中心にして自然とクラス内の交流が図られ、一致団結する機会が非常に多く生まれる。生徒たちもそのことを非常に強く実感していることがうかがえ、高等教育ならびに本庄高等学院における芸術科の学びの意義を大きく見出す一年となつた。

(ク) 家庭

家庭科では、“生き方を学ぶ・生き方を考える”という目的のもと、適切な教材を用意できた。特に、生徒たちの意見交換が進むような題材を取り上げることができた。調理実習は安全に配慮しながら計画通りに実施できた。3年生の選択食文化は少人数授業（20名）であったため、生徒たちは共に教えながら調理することができた。1年生の家庭基礎での実習内容は、焼き菓子、鍋料理（つみっこ：本庄市の郷土料理）、たんぱく質凝固についての調理（カッテージチーズ）であった。調理に対する関心は様々で、学習意欲が低い生徒もいる。そのような生徒に対しどんな動機付けができるかが課題である。又、課外講義として希望する生徒に、カカオ豆から作るチョコレート（Bean to Bar）を実施した。

家庭科は、学びを深めるために多様な価値観に触れることが欠かせない。生徒が感想や意見を発表し、互いに刺激を受け合い、活き活きと授業に参加できるように導かなければならない。学びが浅くならないよう、今後も工夫を重ねていく必要がある。

(ケ) 情報

2021年度から1年生に対して新教育課程「情報Ⅰ」2単位を実施しているが、そこでもプログラミング言語として以前よりも内容を強化した形で、大学各学部から要望の多い統計解析言語Rを実施している。Rのオリジナルテキストを作成し、全生徒に配布して使っている。

2024年度以前の反省として、旧課程では1年次2年次1単位ずつ実施していた授業内容を、新教育課程では1年次2単位となるため、そのまま2学年分を移行したところ、課題に対する生徒負担感と教員の成績評価の負担感が増したことが挙げられる。2024年度はその反省を活かし、内容を削って精選を図った。

情報科の特徴として他校と異なる大きな側面は、本校の特色である探究活動（卒業論文）と有機的な連携を図るため、アカデミックリテラシー養成およびプレゼンテーションスキル養成に関する内容を強調していること、時代の要請に鑑み効果的な情報表現技術を中心に展開していることである。

今後は、生成AI利用のマナーや技術についても指導していく必要があると考えている。

2.1.2 必修科目・選択科目

(ア) カリキュラム

カリキュラムは1年次から3年次まで、各年度32単位構成で3ヵ年96単位となっている。なお、今年度で新課程が観戦している（1年生から3年生までが全て新課程となっている）。

- ・ 1年次：芸術科目を音楽履修クラスと美術履修クラスに分け、その他の必修科目は共通に履修する。
- ・ 2年次：「総合的な探究の時間」以外の科目は共通に履修する。「総合的な探究の時間」は、キャンパスに素材を求めた半期ごとの輪講形式の「大久保山学」（2単位）として実施している。
- ・ 3年次：32単位の構成は、文理共通科目（17単位）、選択科目（14単位）HR（1単位）となっている。文系と理系では、必修選択について科目および科目数が異なる。文系は1科目2単位、理系は4科目12単位である。理系ではさらに「物理・化学選択」と「生物・化学選択」に分かれている。

(イ) 必修科目

必修科目の授業計画は、毎年、前年度の生徒の授業評価の分析・検討に基づいて作成している。また、すべての教科において年度始めにシラバスを作成し、それに沿って授業を展開している。

第1学年では、主に基礎学力重視の観点から中学校の内容との連續性を意識して展開し、第2学年では学力の充実・発展の観点から構成を考えている。第3学年では大学での教育との連携を意図し、各科目の特徴を捉えて授業を行っている。

授業の基本方針は、わかりやすい授業、探究や思考力、判断力、表現力を高め、生徒が主体的に取り組めるような授業形態、大学への架け橋となる専門的な内容を盛り込んだ授業、社会との関わりを意識した授業を心がけている。具体的には理数教科で学部教育の基礎となる学力の強

化をはかるべく、一定の基準に達しない生徒への追試や補習授業を行った。さらに、語学や人文社会科学系の科目では、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業も多く、また、プレゼンテーション技術の習得や論文執筆指導を含む授業展開も多くなされた。

最近では、反転授業・ジグソー法などの新しい授業形態を取り入れたものや、複数科目のコラボレーション授業など、新しい授業形態への取り組みも多い。また、各科目の節々で本学院の特色である論文教育を推進するアカデミックリテラシーを意識した授業展開がなされている。

(ウ) 選択科目

本学院のカリキュラムの最大の特徴として、3年生に豊富かつ多様な選択科目を履修させていることが挙げられる。音楽や美術、第二外国語（フランス語、スペイン語、中国語、朝鮮語等）も含む選択科目は、必修選択と自由選択を併せ、文系は7科目14単位、理系は5科目14単位を選択することが規定となっている。具体的な内容としては、学部の専門科目の導入的な性格を持つもの、時代に必要とされる力を意識したもの、早稲田の一員ということを認識させるものが設置されている。

(エ) 英語能力試験

4月に GTEC Advanced(3技能)、9月に TOEFL ITP、11月に3年生のみ GTEC4技能試験を実施した。GTEC 試験を実施する背景は、

- ① 学院生が自らの英語能力を客観的に知るため
- ② いくつかの学部進学の際に英語力が資格要件として課されているため
- ③ どの学部からも調査書と共に英語外部テストスコアの提出を求められていることに対応するためである。

(オ) 大久保山学

「大久保山学」設置の趣旨は、キャンパス環境を利用した学習教育プログラムや、学際的かつ総合的な視点から学習に取り組むことで、断片的な知識の集積ではなく、総合的な理解力や判断力を養成することを狙いとしている。本学院を取り巻く自然環境や歴史的遺産を生きた教材としてカリキュラムに活用するという考え方がその基となっている。

本学院は本庄市の浅見山丘陵に位置し、面積は70数ha、長辺は1.5kmに及ぶ。丘陵の一部の字名は「大久保山」であり、通称的に丘陵地帯全体を大久保山と呼んでいる。ここからは埴輪や土器などが大量に出土しており、丘陵周辺の平地には条里制の遺構跡も発見されるなど、山全体が歴史的遺産と位置づけられる。また、オオタカをはじめとする多くの野生生物が棲息し、多様な樹木や植物が繁茂している。さらに 本庄キャンパスのわきには利根川の支流である小山川、農業用水路である男堀川が流れ、科学関連プログラムの水質・生物調査の対象になり、地域との交流の舞台にもなっている。

本学院は「将来構想」(2012年11月公開)の中で「大久保山学」を教育の特色の一つとして位置づけ、具体的にどのような教育プログラムが展開できるかについて検討を開始した。そして2013年の「Waseda Vision 150」の中で、「地域の特色を活かした『森に想い土に親しむ』教育を一層発展させた『大久保山学』をテーマに、科目横断型の教育・研究を通じて、社会の各分野で活躍できるリーダーを育成する」と基本理念を定め、その実現を図るために教育プログラムを「大久保山学」とした。

授業は第2学年に対して木曜1・2時限目に8講座を同時開講し、前期と後期で異なった講座を履修するセメスター制とした。生徒は8通りの組み合わせパターンの中から1つを選択することとしている。下表は2024年度のコース一覧である。

コース	前期	後期
1	大久保山から生まれるアート	大久保山での数理探究
2	本庄高等学院の「いま・むかし・みらい」を考え、プロモーションする	データ分析の基本
3	身の回りの風景や土地利用の成り立ちについて考えよう	自然が教えてくれること

4	理論と実践で学ぶ音楽史	大久保山から環境・エネルギー政策を考える
5	大久保山から環境・エネルギー政策を考える	本庄高等学院の「いま・むかし・みらい」を考え、プロモーションする
6	大久保山での数理探究	身の回りの風景や土地利用の成り立ちについて考えよう
7	自然が教えてくれること	理論と実践で学ぶ音楽史
8	データ分析の基本	大久保山から生まれるアート

(力) 理数探究基礎

第2学年に全員必修科目として理数探究基礎を1単位設置している。この科目では、将来、生徒たちが社会で生きていく力をつけていくことを目的としている。その力のひとつとしてSTEAMを設定し、その学びを具現化するため、授業では実験や観察を通して、以下のプロセスを念頭に置いた探究活動を行っている。

① 意思決定

探究の過程で必要な意思決定力につけるためのOODAプロセス。

- ア. Observe (観察)
- イ. Orient (方向付け)
- ウ. Decide (判断)
- エ. Action (行動)

② 品質改善

実験装置や成果物の質を高めるためのPDCAプロセス。

- ア. Plan (企画立案)
- イ. Do (実施)
- ウ. Check (評価)
- エ. Action (改善)

(キ) 探究活動（卒業論文）

3年間の学習のまとめとして卒業論文を執筆させている。「自ら学び、自ら問う」という本学院の教育方針の具現化のひとつである。2年次の9月から10月中旬までの約2か月をかけテーマを決めるが、専任教諭と一部の非常勤講師のからなる担当者と綿密な話し合いをした後に、卒論のテーマが決まる。その後、12月から3年次の12月まで約1年間で、論文を完成させる。テーマに関しては進学希望学部との関連は問わず、自由に選ばせている。

自分の決めたテーマにじっくりと向き合い、資料を集め考察し、自分の意見をまとめ、それを論理的な文章に表す。この作業を通じて、さまざまな課題に問題意識を持つこととその解決方法、学術的な調査の方法、客観的な説得力を持つ文章の書き方、著作権や知的財産権への配慮等を学びながら自分自身の考え方をしっかりと持つことができ、学部進学への自覚を促すことになる。

論文執筆期間の、4月と9月に4000字程度（英文はA3用紙5枚程度）の中間報告を義務付け、その都度担当者と協議をすることになっている。

- ・ 第1次中間報告 4月
テーマ登録からすでに5ヶ月が経過している。この間の進捗状況を報告する。
- ・ 第2次中間報告 9月
夏休みを経過し、まとめの作業に入る前に、論文構成の確認のために目次を作る。

なお、論文の枚数などは以下の通りである。

- ① 用紙:A4、1ページに35行、1行は全角で40字(1ページあたり1,400字相当)。Microsoft Word (doc, docx) で作成。
- ② 分量 15枚以上。
- ③ 規程枚数には目次、本文、図表、注、参考文献リスト等を含める。但しアブストラクトは含めない。
- ④ 印刷:A4(縦書き、横書きともに同じ)用紙の片面に印刷する。
- ⑤ 学院から配布される所定のファイルにとじること。

- ⑥ 表紙には、配付の所定の表紙を使用すること。
- ⑦ やむを得ずタイトルの変更をしなければならない者は、事前に担当教員の許可を得ておくこと。
- ⑧ 英文の場合は、A4用紙にダブルスペース、半角で作成し、片面印刷で25枚以上とするこ
と。枚数に含めるべき内容は和文の論文に準じる。Microsoft Word (doc, docx) で作成す
る。

【卒論報告会】

2月15日（水）13:50～15:40、稲穂ホールにて卒業論文報告会を開催した。2年生生徒に向
け、早稲田大学本庄高等学院3年生3名と慶應義塾湘南藤沢中・高等部6年生1名が、卒業論文
の内容と執筆過程紹介を報告した。

本年の報告のタイトルは以下の通りである。

- ・「コロナ禍から見るアメリカ社会でのアジア人への人種差別の背景と動向」
- ・「栄養バランスの改善が学食の利用者数に与える影響」
- ・「和太鼓の内側が音色に与える科学的な影響」
- ・「ストリートアーティスト研究～たどり着く自己昇華～」

慶應義塾湘南藤沢中・高等部からは教員2名・生徒3名が来校し、卒業論文を通じて活発な学
術交流を行うことができ、有意義な教育機会となった。2年生にとっては執筆を進める上での大
きな指針となり、学習上の効果が達成されたことと思う。

2.2 課外講義

2.2.1 キャリア教育

従来の進路指導では、学部説明会を中心に早稲田大学の各学部で学べる内容を理解し、生徒が
進学先を選択するというスタンスをとっていた。

しかし、留学やセカンドスクール、大学卒業後のキャリアプランなどを視野に入れた進路指導
を考えた時、実際に仕事についている社会人や現役の学生の話を聞き、大学生活のデザインをイ
メージした上で長い社会人生を見通し、大学で何を学ぶかを考えることも必要となってくる。そのためには生徒に、自分の将来をおぼろげにでもイメージさせ、そこへ至る過
程としての大学生活について、高校生のうちからしっかりと考えさせる必要がある。

本校ではこのような進路指導観から、生徒が自分の将来を考えるきっかけとしてのキャリア
教育を充実させるべく、社会人や大学教員、そして現役大学生・大学院生などから直接話を聞く
機会を設けている。これを具現化する目的で、9月に集中的に行うキャリデザインウィークと、
月一度のペースで行うキャリデザイン講座を実施している。

（ア）キャリデザインウィーク

9月にキャリアデザインウィークを設け、現在の学院生活、大学、その先の将来を有機的に結
び付けたキャリアパス意識を啓発するような講座を集中的に行った。以下の表にその概要を示
す。

[進学の部]

9/11（水）

- ・法学部「法哲学」／43名（参加者数、以下同）
- ・文化構想学部「文化人類学とアニミズムの世界」／29名
- ・創造理工学部「経営を工学するってどんなこと？～プロフィット・デザインからの思考～」／
59名
- ・人間科学部「私たちは宇宙で孤独なのか？生命を育む地球環境と宇宙における生命探し」／33
名
- ・政治経済学部「社会問題解決のための力：経済学で解く環境問題」／111名
- ・先進理工学部「高度情報化社会を根底で支える光集積回路技術」／29名
- ・国際教養学部「Walking with History: Winston Churchill and World War II」／30名

9/18 (水)

- ・教育学部「私たちの心と自信」／34名
- ・商学部「An Introduction to Health Economics」／22名
- ・社会科学部「古人類の社会」／29名
- ・文学部「プルースト『失われた時を求めて』の世界への誘い」／21名
- ・基幹理工学部「量子が支配する物性」／25名
- ・スポーツ科学部「からだ作りとけが予防のためのスポーツ栄養学」16名

〔就職の部〕

9/14 (土)

- ・テレビ局アナウンサー「好奇心」を原動力に、学び、働く」／31名
- ・自治体首長「町長首長を志す一早稲田大学本庄高等学院の教育を通じて一」／25名
- ・朝日新聞社研究員「好きなことばかりして生きていてすみません、と、その方法、効用、副作用」／16名
- ・特定非営利活動法人アニメ特撮アーカイブ機構職員「フリーライターとアーカイブ活動の仕事」／13名

【進学の部】

早稲田大学の各学部から講師が来校し、各学問分野で最先端をいく高度な内容の講義が、高校生の理解度に合わせて行われた。本庄高等学院の卒業生たちの学部や大学院での活躍を紹介してくれた講師もいて、会場は大いに盛り上がった。生徒たちは、講演の後も活発に質疑を行うなど、講師とのやり取りを行うことができた。附属校生徒として大学での学びを意識し、また、ミスマッチのない進路選択をするための情報を得る良い機会となった。

【就職の部】

既に社会人となった4名のOBが講演を行った。多彩な就職先の卒業生が集い、学院生活や学部選択、大学生活や就職活動の話を熱心に披露してくれた。各分野でのトップランナー達の話は大変興味深く、参加した生徒たちは熱心に講師の話に耳を傾けていた。

(イ) キャリデザイン講座

9月に集中的に行うキャリデザインウィークと並行して、およそひと月に一度、年間6回程度のペースで本校OB/OGを招き、キャリアデザイン講座を開講している。以下は2024年度実施内容である。

	日程	職業	タイトル
第1回	4月20日 (土)	新聞社	新聞社で働くということ
第2回	5月25日 (土)	テレビ局アナウンサー(2名)	テレビ局の仕事
第3回	6月15日 (土)	M&A	M&Aについて、起業することとは
第4回	10月12日 (土)	農林水産省	国家公務員の仕事
第5回	11月9日 (土)	検事	法曹の仕事
第6回	12月7日 (土)	外資系	外資系の仕事について
第7回	2月1日 (土)	公認会計士(2名)	公認会計士の仕事

2.3 行事

2.3.1 稲稜祭

前年度の反省を踏まえて4月から計画的に準備を進めることができた。特に、各学年における企画ジャンルや数を制限することで工夫が凝らされ、学院生だけでなく多くの来場者に楽しんでもらえる文化祭を実施することができた。

食品販売の在り方も、完全に従前と同様にするのではなく、本庄高等学院の現状に則した内容への更新を狙った。前年度の「既製品のみの販売」に加え、「既製品に簡単な一手間を加えたもの」、「レンタル機材による調理品」とし、いずれも迅速に提供でき、生協が販売するものと被らないものに制限することで、今後の良いモデルケースが出来上がった。

1日目が雨天だったため、メインステージや軽音楽ステージを体育館に移行することとなつたが、新校舎および新体育館での雨天時開催の貴重な前例を作ることができた。来客の動線をうまく整理できなかつた以外は、大きなトラブルも無く終了し、初日（土曜日）1,491名、2日目（日曜日）2,655名、延べ4,146名の来場があった。実行委員の振り返りアンケートからも、準備作業を含めて充実した日々を過ごせたことがうかがえる。

多くの面で今後につながるモデルケースが出来上がった稻稜祭となった。次年度以降は、定着と教員間での連携をより強固にしていく必要があろう。

2.3.2 体育祭

体育祭は種目の選定から運営まで生徒が主体となって進めた。個人種目の他、クラス全員リレー・綱引き・大縄跳び・ムカデリレーなどで競い体育祭を通じてクラスが思いをひとつにした。どの競技も、生徒が一生懸命競技に参加し、大いに盛り上がりを見せた。また、クラスの生徒へ向けての声援や、クラス全体での円陣など、集団生活の中でしか味わうことのできない貴重な経験もできた。

熱中症が心配な時期であったが、幸いにも程よい気温のもとに開催することができ大きな影響がなかつたことも良かった。「紺碧の空」合唱で見えた生徒達の熱量には、生徒達の心情が反映されていたと思うと、日常生活では得難い時間となった。

2.3.3 球技大会

第1・2学年で実施した。男子はフットボールとサッカー、女子はバレーとドッヂボールをおこなつた。野球場、サッカー場、体育館をフル活用して、体育の授業だけでは得られない、クラスが団結する有意義な時間であった。天候にも恵まれ、秋晴れの青空のもと生徒の笑顔が輝いていた。

2.3.4 人権教育

本年度の人権教育講演は9月26日（木）LHRの時間を活用し、第2学年を対象に実施した。秋葉丈志准教授（早稲田大学スチューデントダイバーシティセンター長）や学生スタッフの方々にお越しいただき、が「ダイバーシティ講演会」をテーマとする講演を行つた。

また講演会終了後には、図書館で昼休みに学生スタッフと、学院生で交流会（フリートーク）を行つた。大学の学生スタッフの方々と積極的に意見交換を行い、ダイバーシティについて深く考える貴重な機会となつた。

2.3.5 芸術鑑賞教室

11月6日（水）に、本庄市民文化会館で実施した。3年生が校内で試験を実施するため、1,2年生のみ参加となつた。2024年度は「中国芸能雑技団」の鑑賞会を実施した。休憩無しの約90分間だったが、生徒たちは目の前で繰り広げられる異次元のパフォーマンスに終始圧倒され、最後まで飽きることなく楽しんでいた。

本公演には「1分の演技に10年の鍛錬」という謳い文句があり、公演後に実施した生徒アンケートでもそのことが多く触れられており、生徒たちもその重みや凄みを充分に感じて鑑賞できていたようである。

2.3.6 早慶野球戦観戦

6月1日に行われた六大学野球リーグ最終戦（早慶戦）の応援に第1学年行事として参加した。当日は気温が高くなつたが、日陰で休む等の対応で大事には至らなかつた。

試合は序盤から早稲田がリードし、ホームランを含む8点を挙げて早稲田が勝利した。点が入るごとに、一塁側の応援席全体で「紺碧の空」を熱唱することができ、大いに盛り上がりを見せた。試合後には、球場全体で早慶のエール交換を行い、早稲田としての一体感を感じる有意義な行事となつた。

2.3.7 秋の学年行事

第1学年

10月25日(金)、東京都新宿区での校外学習を実施した。制度改革により貸切バス予約が難しくなつたため、前年までのバス利用の遠足ではなく、現地集合スタイルの行事に変更した。まず、新宿末廣亭にて団体貸切公演を鑑賞した。末廣亭はイス席が少なく桟敷席が多いいため、事前に各クラス男女でグループを作り、くじ引きで着席場所を決めておく必要があつたが、着席はスムーズに行えた。公演は、落語・開口一番、曲独楽、落語、紙切り、落語という約2時間の内容であった。生徒たちは、落語や色物（曲独楽、紙切り）を楽しみ、笑いが溢れる寄席の雰囲気を満喫できていた。特に、曲独楽では生徒1名が招かれて登壇し、演者とともに即興の芸を行い、場は大いに盛り上がつた。公演終了後、着席グループごとに末廣亭から徒歩約15分の新宿御苑に移動した。新宿御苑は団体入場口から揃って入場する必要があるため、クラスごとに整列して入場し、その後は各自自由散策とした。都心の観光名所の一つである新宿御苑では外国人観光客も多く訪れており、生徒たちは各々都心の自然庭園を満喫していた。昼食をまとめて摂ることが難しかつたため、自由散策後は流れ解散とした。短い時間ながら、著名な文化施設を巡りつつ、生徒同士が親睦を深める良い機会となつた。

第2学年

2024年度の第2学年の学年行事は10月25日(金)に本学院の稲穂ホールにおいて学部説明会及び卒業生による座談会の2つの内容構成で行われた。前者の学部説明会については、6月1日(土)に本部キャンパスで行われた学部説明会の際に実施できなかつた2つの学部、人間科学部及びスポーツ科学部の担当者による学部説明をそれぞれ質疑応答も含め30分ずつ実施していただいた。後半のプログラムは本学院卒業生3人による座談会形式の講演会であった。一人目は政治経済学部を出て大手広告代理店勤務を経て現在は起業した人、二人目は法学部を出て弁護士として大手広告代理店の法務部門で活躍している人、三人目は理工の建築学科卒で現在は畠違いの分野ではあるが活躍している人で、それぞれ30分程度、その後の質疑応答も含め13:00前には終了した。この卒業生による座談会は生徒に大変好評で大いに刺激になつたようである。その意味では、今年の秋の学年行事は単に学部説明会だけで終わるのではなく生徒の先輩方が実社会で活躍している生の姿を見せることができた点で大変有意義なものとなつた。

2.3.8 健康教育

【第1学年】

6月20日(木)「ストレスと上手につきあおう」、樋木啓二氏（早稲田大学学生相談室心理専門相談員）

【第2学年】

9月12日(木)「デートDVとは～お互いを尊重したつきあい方を学ぶために～」、西山さつき氏（NPO法人レジリエンス代表）

【第3学年】

12月5日(木)「これから役立つメンタルヘルス～高校卒業の機会に知っておいてほしいこと～」、瀧村剛氏（久里浜医療センター精神科医）

各学年に1回、専門の講師を招き、心身の健康に関する健康教育講演を実施した。1年生は学

院生活において相談スキルを上げること、2年生はお互いを尊重したつきあい方を学ぶこと、3年生はあらゆる依存症について知り、今後の人生において相談スキルを上げ、より良いストレス対処方法を選べるようになることを目標とした。生徒は健康に関する講話に関心が高く、ロールプレイングなど意欲的に参加し、有意義な機会となった。

2.3.9 交通安全等講話

4月9日（火）に、第1学年オリエンテーションの一環として、「交通安全防犯講話」を実施した。

本庄警察署員による講話で、交通課の方からは主に自転車の安全走行や登下校中の防犯に関するお話を、生活安全課の方からはSNSでの犯罪やトラブルに関する内容について、映像も交えた話をしていただいた。近年、自転車通学の生徒は減少しているが、自らが加害者にも被害者にもなり得ることを踏まえ、継続して交通安全への啓発を行なっている。生徒の受講態度も良く、交通安全への啓発を効果的に行なうことができた。

2.4 課外活動

2.4.1 生徒会活動

4月の対面式では全校生徒による校歌斉唱が行われ、應援部やブラスバンド部による迫力あるパフォーマンスに新入生たちは感銘を受けていた。その後の4月は、新入生オリエンテーションにおける部活動紹介、文化部合同発表会が行われ、新入生の部活動選びに大いに貢献した。

11月の稲穂祭では生徒会執行部によるキャンパスツアーや個別相談会を開催し、多くの参加者を集めていた。恒例の生徒会誌は1月に発行し、全学院生に配付したほか、2025年度新入生にも配付される予定である。

1月下旬に開催された本庄市による市内高校合同文化祭「七高祭」にも執行部をはじめとする学院生が運営メンバーとして多数参加した。今回の七高祭では、企画に吉本興業が入って様々なプロジェクトが立ち上げられていたが、いずれの企画でも本庄高等学院の生徒が中心的な役割を担っており、七高祭の成功に大きく寄与していた。

その他、赤十字血液センターの献血バス配車による献血が11月に行われた。コンタクトレンズケースの回収事業も順調に進んでおり、次回も相当量の寄付を行える見込みである。

今年度に行われた生徒会役員選挙では、会長および副会長に定員を超える立候補が集まり、選挙前の朝には立候補者が挨拶に立ち投票を呼び掛けるなど、大人さながらの白熱した選挙戦が展開された。学院生の中でも今回の選挙への関心度は高く、新執行部における今後の活動が期待される。

2.4.2 部活動

文化部門20、体育部門14のクラブが活動した。

各団体の活動目的は心身の成長を目指すもの、より上位の大会での成果を目指すもの、稲穂祭での発表に力を注ぐもの、部員の親睦を図るものなど異なるが、それぞれの目的に向かって活発に活動した。長期休業には多くの団体が合宿を実施し、生徒同士が親睦を深める有意義な時間を過ごした。

各種大会でも生徒たちが伸び伸びと力を發揮し、今年度は全国大会に陸上部、硬式テニス部、囲碁将棋部、書道部が出場、関東大会にソフトテニス部が出場するなど多くの活躍がみられた。

2.4.3 プロジェクト活動

課外活動に対する学院生のニーズが多様化していることに応え、部活動にない活動に取り組む有志団体について、顧問の指導のもとで充実した活動ができるよう2022年に設けた公認制度である。

2024年度は、国際交流プロジェクト、地域連携プロジェクト、企業連携プロジェクト、附属連携プロジェクト、科学未来館連携プロジェクトの4団体が公認され、活動を行った。

(ア) 国際交流プロジェクト

SGH・SSH活動で培った国際学術交流活動の発展・継続を図る。参加生徒は随時募集し、各活動において生徒主体でコーディネートを行った。

- ・ 韓国セロナム高校とはコロナ禍よりオンラインシンポジウムを継続してきたが、今年度はセロナム高校へ10名の生徒が訪問し、Korea-Japan International Youth Forumを開催。
- ・ シンガポール・ナショナルジュニアカレッジ(NJC)との相互訪問交流。
- ・ タイのMahidol Wittayanusorn Schoolとの相互訪問交流活動。
- ・ 韓国のHana Academy Seoulとの相互短期留学、国際シンポジウム参加。

(イ) アントレプレナーシップ活動プロジェクト

早稲田大学アントレプレナーシップセンターとの連携で実施する、本学院のアントレプレナーシップ活動を推進した。具体的な活動は以下の通り。

- ・ 本庄市におけるWEYI地域創生アイデア創出プログラム
- ・ WASEDA Demo Day、GTIE等への参加
- ・ スタンフォードd-schoolプログラム開催
- ・ その他、附属系属校間、他高校とのアントレプレナーシップ活動

(ウ) 地域貢献・連携プロジェクト

本庄市および近隣地域への貢献活動・還元活動、地域企業との連携活動を行う。参加生徒は随時募集した。具体的には、以下の活動を主とした。

- ・ 地域小学校への総合学習支援活動（本庄早稲田国際リサーチパークとの連携）
- ・ 地域小学校への国際理解教育支援活動（本庄早稲田国際リサーチパークとの連携）
- ・ 本庄市民総合大学・こども大学本庄への協力（本庄市との連携）
- ・ 地域企業との連携活動
- ・ こども科学教室の開催（本校主催）
- ・ その他地域との連携活動

2.4.4 科学教育課外プログラム

(ア) 特別講義「これがサイエンスだ！」

本学院教員による特別講義「これがサイエンスだ！」を、以下の内容で実施した。この講座は2013年度から開始され、毎年数回、生徒たちに対して科学に興味を持つきっかけになることを目的に実施している。昨年度に引き続き、今年度も全て対面で実施した。

第1回 4月27日（土）「心理学を知り、科学の信頼性を考えよう！」早稲田大学基幹理工学部助手 杉本海里 氏

第2回 5月27日（月）「L-function of CM elliptic curves and generalized hypergeometric functions」数学科教諭 根本裕介

第3回 5月27日（月）「スターリング数であそぼ。」数学科教諭 太田洋平

第4回 5月28日（火）「超ひも理論を学んでみよう」早稲田佐賀中学校・高等学校 物理科教諭 當山翔平 氏

第5回 5月28日（火）「ベイズ統計に触れてみよう」早稲田佐賀中学校・高等学校 数学科教諭 伊東哲平 氏

第6回 6月14日（金）「海洋プラスチック問題を考える」数学科教諭 矢島史仁

第7回 7月12日（金）「ウォリスの公式とその周辺の不思議な公式」数学科教諭 峰真如

第8回 10月15日（火）「量子もつれとは何か」本庄高等学院3年 逸見康介・数学科教諭 峰真如

第9回 2月4日（火）「複素数で世界を広げよう」数学科教諭 成瀬政光

第10回 2月14日（金）「量子コンピュータへの招待～深遠な世界を知る～」人間科学部1年、本庄学院卒業生 鈴木翔太・数学科教諭 峰真如

また今年度も、長期休業中の合宿を実施することができた。今年度も夏合宿（2024年8月）と

春合宿（2025年3月）を実施した。この合宿は「授業では扱わない専門性のある内容を探究し、進学や将来について新たな視点をもつ」ことを目的とし、宿泊しながら一つのテーマを探究する。最終日には各パートから成果報告を行う。

夏合宿は2024年8月24日（土）から26日（月）の2泊3日で行われた。この合宿では、参加者が生物・数学・物理・卒論の4つのパートに分かれ3日間かけて探究活動を行った。

生物パート：「森林生態系における炭素循環」理科非常勤講師 樽見知樹

数学パート：「ある分布にしたがって生成された多数のデータから、元の分布を推定すること」

数学科非常勤講師 新井康太

物理パート：「古墳の宇宙線による調査」理科教諭 大塚未来

卒論パートでは、それぞれのテーマについて集中的に取り組んだ。合間には特別講義が実施され、数学科矢島史仁氏から「ルービックキューブであそぼ。」、数学科太田洋平氏から「モノイドの作用の圏からのモノイドの復元について」というタイトルで講演があった。今回は参加者が40名を超える、たいへん熱気のあるものとなった。

春合宿は2025年3月19日（水）から21日（金）の2泊3日で行われた。参加者は数学パート・物理パート・自主探究（古墳）パートに分かれ探究活動を行った。数学パートは複素平面と複素解析、物理パートは表面張力、古墳パートは宇宙線を用いた調査をそれぞれテーマに探究を進めた。

探究活動の合間には、数学科新井康太講師から特別講義「リスクを見るための確率論」、生物科樽見知樹講師特別講義「『炭』が地球温暖化を食い止める！？～バイオチャーによる炭素隔離とその社会実装を見据えて～」をそれぞれ行った。

各パートの成果報告会・卒論報告会の時間は、入学予定の生徒にも公開した。合宿を通じて、普段経験できない「時間を気にせずチームワークでサイエンスをする」という経験ができたことは大変有意義だったように思える。

（イ）河川研究班の活動¹

河川研究班の活動は、2009年に開始された。当時本庄市・早稲田大学榎原研究室が進めていた元小山川の河川環境改善活動に加わる形で、当時のSSHプログラムの1つとして実施された。2012年には同様に河川環境保護活動を行っていた本庄市立藤田小学校と連携し、年2回の合同河川調査と年8回の5・6年生の総合学習の授業を本校生徒が受け持つこととなった。河川研究班は部活動ではない。この活動に興味を持つ生徒を毎年新年度に募集し、10～15名の生徒で活動している。多くの生徒は3年間継続する。

今年度は、合同河川調査を5月、10月の2回、授業は6回実施した。



3月15日開催された川のシンポジウム

¹ 42pにも関連記事を記載。

なお、河川研究班の活動のポイントの1つは、河川環境保護に関わる市民シンポジウムを中心とした広報・啓蒙活動である。3月15日（土）13時～14時半に早稲田国際リサーチパークで「川のシンポジウム」を実施した。2021年2022年にオンライン参加している三重大附属小は、昨年に続き今年も4名の児童が対面参加した。石川県立七尾高校がオンライン参加した。

また、活動に対し2024年度川のワークショップ関東大会で特別賞、いい川・いい川づくりワークショップ全国大会で準グランプリを受賞した。

2.5 国内外交流・研修

2.5.1 修学旅行

修学旅行は新型コロナウイルスの影響により、2020年度と2021年度は中止、2022年度と2023年度は国内修学旅行として復活させた。本年度は、コロナ禍以前行っていた海外修学旅行を再開することができた。日程は10月21日（月）から25日（金）の4泊5日で、行き先を韓国（名）と台湾（名）2コースとした。それぞれの国には交流校があり、その学校での受け入れ可能な人数で参加者を割り振った。行先に関しては、できる限り生徒の希望が叶うようにした。また、修学旅行は班単位での行動を原則としているため、事前学習や現地での行動はできる限り班単位で行った。

日 程：2024年10月21日（月）～10月25日（金）4泊5日

合 計：生徒310名 不参加5（男子3、女子2）

【韓国】

生徒 : 13名（男子44、女子69）

引率 団長 : 生徒担当教務主任

第3学年 : 3名

学年外 : 2名

看護師 : 1名

交流校 : 安養外国語学校

【台湾】

生徒 : 195（男子130、女子65）

引率 団長 : 半田亨（学院長）

第3学年 : 4名

学年外 : 5名

看護師 : 2名

交流校 : 台中第一高級中学

【不参加者】 : 5名

※不参加者へは、修学旅行期間中の学習計画表を事前に提出させ、修学旅行期間中は9:10～13:10まで情報教室で各自の課題を取り組ませた。また、水曜日と木曜日に2時間ずつ稲穂祭準備活動をした。

〔担当教員〕 3学年組主任1名

2.5.2 海外からの訪問交流

2024年度は長年の交流がある海外高校4校からの訪問交流が実施できた。

台中一中訪日修学旅行団の訪問は、本学院の修学旅行で毎年200人近い3年生が訪問交流させてもらっているパートナー校ということで、三学年全体で歓迎行事に関わった。在校生の関心も高く、アテンドするバディを募集したところ1～3年生約60名が名乗り出て、1対1交流が可能になった。英語だけなく中国語を使えるということで立候補した生徒も複数おり、複数言語の交流会を催すことができた。滞在中の台湾の留学生も引率教員エスコートや来校交流レポート作成に貢献した。

NJC, MWIT, HAS は来校生徒数は少人数だが、来校目的に沿ってより濃密な体験ができるよう工夫が重ねられた。協働研究で長期間交流している生徒に留まらず、地元小学校での出前授業(NJC, MWIT), 学内での文化体験ワークショップ(MWIT)など、国際交流プロジェクトにより多くの生徒が関わるような機会が設けられた。本学院ではホームステイは実施していないが、HASの短期留学生受け入れ期間には保護者の会のご協力で日本の家庭生活に「日帰り」で触れてもらう企画「Holiday with a Japanese Family」を実施できた。

交流校からの訪問は以下の通りである。(URL は本学院ホームページでの紹介記事)

◆台中市立台中第一中学 (台湾)

滞在期間：5月27日（月） 人数：生徒50名、校長、引率教員3名

目的：訪日修学旅行日程内の1日交流

来校交流企画：歓迎交流会、授業体験、文化交流

交流行事レポート：

「台中第一高級中学修学旅行団の本庄学院訪問」

<https://www.waseda.jp/school/honjo/news/5454>

「台中一中修学旅行団 来校交流レポートです（日本語・中国語）」

<https://www.waseda.jp/school/honjo/news/5669>

◆National Junior College (NJC) シンガポール

滞在期間：11月8日～11月14日 人数：生徒10名、引率者2名

目的：8月からの協働研究「水への理解」の探究学習、フィールドワーク、文化体験

来校交流企画：博物館等見学、科学ワークショップ、河川生物・水質の現地調査、授業体験

交流行事レポート：「Singapore National Junior College (NJC) の本庄学院訪問」

<https://www.waseda.jp/school/honjo/news/6300>

◆Mahidol Wittayanusorn School (MWIT) (タイ)

滞在期間：10月14日～10月20日 人数：生徒10名、引率者2名

目的：河川研究を核とした探究学習、フィールドワーク、文化体験

来校交流企画：博物館等見学、科学ワークショップ、文化紹介、授業体験

交流行事レポート：「MWIT の本庄学院訪問」

<https://www.waseda.jp/school/honjo/news/6232>

◆Hana Academy Seoul (韓国)

滞在期間：1月12日～1月19日 人数：3名

目的：短期交換留学（授業・生徒寮生活体験、文化体験、フィールドワーク）

来校交流企画：都心での自主研修、授業体験、近隣への「遠足」、「家族と過ごす休日」

交流行事レポート：

「韓国 Hana Academy Seoul (HAS) から3名の短期留学生がいらっしゃいました！（1）」

<https://www.waseda.jp/school/honjo/news/6498>

「韓国 Hana Academy Seoul (HAS) から3名の短期留学生がいらっしゃいました！（2）」

<https://www.waseda.jp/school/honjo/news/6533>

◆台中市立台中第一中学 (台湾)



歓迎式・文化交流



食堂での昼食会

◆National Junior College (NJC) シンガポール



川で生物調査



秋平小での授業

◆Mahidol Wittayanusorn School (MWIT) (タイ)



物理特別授業



タイ文化講座

◆Hana Academy Seoul (韓国)



歓迎会でのスピーチ



茶道・和服体験

2.5.3 留学

(ア) 長期留学生の受け入れ

今年度も3人分、4名の長期留学生を受け入れた。2023年度9月に留学を開始した日台交流協会派遣の陳伸睿さん(～7月)と2025年7月まで滞在する吳英齊さん(8月末～)、文部科学省とAFSの「架け橋プラス高校生」チャン・ウンソさんとコムサン・サローチャーさん(8月末～12月)である。留学生の学齢と本学院の教育プログラムを考え、陳さんは3年生、吳さんとコムサンさんは2年生、チャンさんは1年生が受け入れクラスとなった。留学生への支援は受け入れクラスの担任と留学・交流委員、生徒担当教務主任と寮主任が分担して行った。授業では留学生それぞれの言語レベルと興味関心に応じて所属クラスの通常授業および他学年・他クラスの授業を組み合わせた個別の時間割を作成する形で支援する。陳さんの3年生選択科目は支援の対象となったが他の3人は日本語力が高く、所属クラスですべて学んだ。

4人は部活動や学校行事に参加するほか、地域の国際理解を深める企画や他学年の行事にも参加した。2学年では留学生から学ぶという趣旨の学年集会も開かれた。出身国の厳しい選抜を勝ち抜いて来日した留学生たちだけに、学内外でいずれも見事なミニ講義を行い、在校生や参加者に大いに刺激を与えた。優れた日本語力を生かし、本学院ホームページTopicsに母語と日本語で寄稿をしたり、寮生活について母語での説明書を作成するなど、国際交流にも貢献してくれている。

授業や部活動で関わる教職員も増えたことで、支援や指導の方法などで教職員間で意見交換をする機会も増え、留学生の個性を大事にしながら正規学生と一緒に育成していく気風が醸成されつつある。担任の負担を増やすことには留意が必要だが、生徒たちは受け入れクラスになることを喜ぶ気風が見られる。在校生にとって複数の長期留学生と接するインパクトは大きく、海

外交流校への派遣プログラムに応募する際に「留学生と親しくなったことで自分も海外の学校に行きたくなった」と述べる生徒もいるなど、好影響がみられている。

留学生個々の状況は以下の通りである。

- ① 陳 伸睿 (CHEN, Shen-Jui) さん (台湾・嘉義市出身、早苗寮生)
- 支援団体：日本台湾交流友好協会
 - 所属学年：3年生 (担任の担当教科は地理)
 - 本学院滞在期間：2023年9月1日～2024年7月15日
 - 学習支援：必修科目は受け入れクラスの通常授業 (一部は自習時間に振替) 、選択科目は本人の関心と日本語力を考慮して選択
 - 言語支援：授業中はスポット的な個別対応以外は特になし (日本語はN2レベル)
早稲田大学日本語教育研究センターによる「わせサポ」の相談セッションの支援
 - 部活動等：書道部、茶道部、軽音楽部に所属
 - 発表活動、コミュニティへの貢献等：地元小学校での国際理解・英語学習支援授業等参加、Waseda English Kids、書道部・軽音楽部メンバーとして学園祭発表に参加。
- ② 吳 英齊(WU, Yin-Chi) さん (台湾・台中市出身、梓寮生)
- 支援団体：日本台湾交流友好協会
 - 所属学年：2年生 (担任の担当教科は保健体育)
 - 本学院滞在期間：2024年8月22日～2025年7月17日
 - 学習支援：受け入れクラスの通常授業
 - 言語支援：特になし (日本語はN1レベル)
 - 部活動等：書道部に所属
 - 発表活動、コミュニティへの貢献等：地元小学校での国際理解・英語学習支援授業等参加、Waseda English Kids、書道部・メンバーとして学園祭発表に参加。台中一中修学旅行団来校時の歓迎行事サポート
- ③ チャン ユンソさん (韓国出身、梓寮生)
- 支援団体：AFS 群馬支部 (アジア高校生架け橋プロジェクト 第6期生)
 - 所属学年：1年生 (担任の担当教科は国語科)
 - 本学院滞在期間：8月25日～12月14日
 - 学習支援：受け入れクラスの通常授業
 - 言語支援: AFS 群馬支部メンバーによる月一度のカウンセリング (日本語はN1レベル)
 - 発表活動、コミュニティへの貢献等：Waseda English Kids、地元小学校での国際理解授業参加
- ② KHOMSAN Sarocha (シェナ) さん (タイ出身、梓寮生)
- 支援団体：AFS 群馬支部 (アジア高校生架け橋プロジェクト 第6期生)
 - 所属学年：2年生 (担任の担当教科は英語)
 - 本学院滞在期間：8月25日～12月14日
 - 学習支援：受け入れクラスの通常授業
 - 言語支援：AFS 群馬支部メンバーによる月一度のカウンセリング (日本語はN1レベル)
 - 発表活動、コミュニティへの貢献等：Waseda English Kids、地元小学校での国際理解授業参加、2学年集会でのタイ文化紹介

長期留学生の発表活動・コミュニティへの貢献の詳細は以下に掲載している。

◆発表活動

吳英齊さん二言語寄稿

「稲稟祭体験記：台湾の文化祭と日本の文化祭の違い / 稲稟祭體驗記：台灣校慶以及日本文化祭的差異」

<https://www.waseda.jp/school/honjo/news/6662>

チャン・ウンソさん二言語寄稿

「韓国の留学生が見た稻稟祭 한국 유학생이 본 학교 축제」

<https://www.waseda.jp/school/honjo/news/6416>

◆コミュニティへの貢献

「WASEDA HONJO ENGLISH KIDS(WEK)2024 を開催しました！」（12月8日）

<https://www.waseda.jp/school/honjo/news/6390>

「小学校プログラム「国際理解」@仁手小」（9月18日）

<https://www.waseda.jp/school/honjo/news/6056>

「小学校プログラム「国際理解」@中央小」（10月30日）

<https://www.waseda.jp/school/honjo/news/6221>

「小学校プログラム「国際理解」@秋平小」（12月4日）

<https://www.waseda.jp/school/honjo/news/6351>

「小学校プログラム「国際理解」@共和小」（1月15日）

<https://www.waseda.jp/school/honjo/news/6522>

「小学校プログラム「国際理解」@藤田小」（1月29日）

<https://www.waseda.jp/school/honjo/news/6586>



Waseda English Kids



仁手小にて（コムサンさん）



共和小にて（吳さん）



秋平小にて（チャンさん）

（イ）「荻野奨学金」を活用した受入留学生支援（第四年次）

本学院は、早稲田大学で学ぶ留学生の学習支援のための指定寄付「荻野奨学金」を活用する箇所の1つとして選ばれ、21年度から25年度までの5ヶ年間に受け入れる留学生の学習、および留学生と在校生との共同学習にこの奨学金が使えるようになった。

活用初年度に、留学・交流委員会で活用ガイドラインを作成し、使用目的が

- A. 留学生が日本および学校生活のルールや慣習を理解し、大きな支障なく心身ともに健康に

滞在できるための支援

B. 留学生が日本語を学び、高校生の生活をより深く理解するための支援（公立学校や早稲田大学訪問、部活動大会の参加支援などを含む）

C. 留学生が日本の風土・文化・芸術・歴史や現代社会の動き等を、学院生と共に学ぶための支援

に原則として該当するものに支出するとした。24年度の活用事例は以下の通りである。

① UDトーク（音声言語の翻訳字幕自動作成アプリ）教育機関向けプラン契約料（目的A、B）留学生が滞在期間中に可能な限り通常授業に参加できるようにするために、言語支援を目的として2024年11月まで契約を更新した。24年度1学期に陳さんが活用した。

② 学年行事への参加（目的B、C）

留学生が他学年の学年行事に参加する場合の経費として活用した。5月には3年生である陳さんが1学年行事の早慶戦観戦に参加。10月には1年生であるチャンさんが2年生の呉さん・コムサンさんと共に2学年行事の寄席体験に参加した。

2024年度は留学生3名の日本語力が高かったことと、国際交流企画が活発化しガイドラインCに当たる特別企画を組む余地がなかったことから、過去3年より活用例は少なくなった。

（ウ） 短期海外派遣⁴

2024年度はコロナ禍前に実施していた共同研究プログラムを再開できたほか、2回のニュージーランド短期留学プログラムの継続、韓国のセロナム高校との学術フォーラム、HANA Academy Seoulとの交換留学を実施した。短期留学プログラムへの在校生および保護者の関心は高く、参加者の帰国後の国際交流参加への意欲や留学志向は確実に高まっている。一方、渡航費や諸経費の高騰は参加申し込みへの大きな制約になってきている。

① 早稲田大学高大連携推進課 より国際部・WASの支援によるプログラム

◆スイス公文学園 Summer in Leysin プログラム

- 派遣国：スイス 人数：1名（引率は主催者）
- 期間：7月12日（土）～8月25日（日）
- 滞在地：スイス公文学園

◆Kia Ora Program 2024 Summer

- 派遣国：ニュージーランド 人数 計17名（高等学院からも13名、引率は主催者）
- 期間：8月3日（土）～8月24日（土）
- 滞在地 Palmerston North 9名、Hawke's Bay 8名

◆Kia Ora Program 2025 Spring

- 派遣国：ニュージーランド 人数 12名（高等学院からも15名、引率は主催者）
- 期間 3月23日（土）～4月5日（土）
- 滞在地 Palmerston North 6名、Hawke's Bay 6名

② 交流協定校との学術交流・短期交換留学プログラム（高校間の協働研究・交流プロジェクト）

◆セロナム高校との国際学術交流

派遣国：韓国 人数：生徒10名、引率者2名

期間：7月17日～7月20日

目的：SGDs関連のテーマでの探究学習（5月から数回のオンラインミーティング）、国際フォーラム実施、韓国文化体験

参加レポート：「Korea Japan International Youth Forum 2024 参加レポート」

<https://www.waseda.jp/school/honjo/news/5838>

◆5th International Symposium Sustainable Development

派遣国：韓国 人数：生徒7名、引率者1名

期間：7月22日～26日

目的：国際高校生シンポジウム参加（韓国・日本・ブルガリア・タイ・中国）の5カ国から11校の参加。日本の参加校は本学院、早大高等学院・鷗友学園・学習院高等部・筑波大学付属高校。）

滞在地：Hana Academy Seoul

参加レポート：「15th International Symposium Sustainable Development Report」

<https://www.waseda.jp/school/honjo/news/5705>

◆シンガポール研修

派遣国：シンガポール 人数：生徒10名、引率者2名

期間：8月6日～8月12日

目的：協働研究・フィールドワーク・文化交流

滞在地：Singapore National Junior College

参加レポート：「シンガポール研修報告」

<https://www.waseda.jp/school/honjo/news/5794>

◆タイ研修、International Science Schools Fair 2025

派遣国：タイ 人数：生徒10名、引率者2名

期間：1月26日～2月3日

目的：高校生国際科学シンポジウム ISSF 2025 参加、フィールドワーク、文化交流

滞在先：Mahidol Wittayanusorn School, Mahidol University

参加レポート：「International Science Schools Fair (ISSF) 2025 およびタイ研修報告」

<https://www.waseda.jp/school/honjo/news/6589>

◆HANA Academy Seoulとの短期交換留学

派遣国：韓国

人数：生徒3名（鷗友学園・学習院高等部と共に参加。現地引率者はホスト校）

期間：3月23日～3月31日

目的：短期交換留学（授業・生徒寮生活体験、フィールドワーク、ホームステイ）

滞在先：HANA Academy Seoul

◆セロナム高校との国際学術交流



シンポジウム



陶器製作体験

◆5th Hana International Symposium



パネルディスカッション

◆シンガポール研修



協働研究成果発表

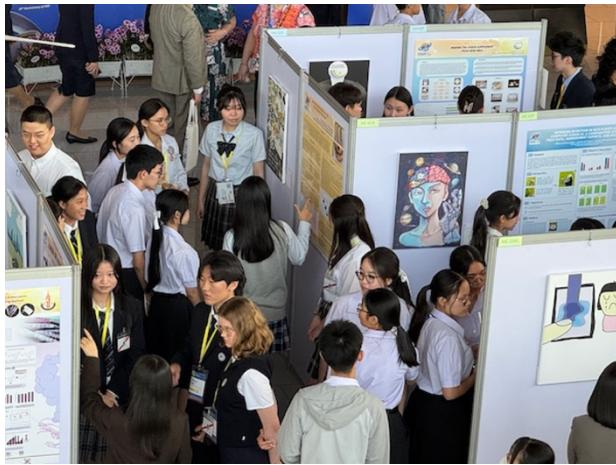


市内研修 Cloud Forest にて

◆ISSF 2025、タイ研修



ISSF 2025 開会式



ポスターセッション

◆HANA Academy Seoul との短期交換留学



1月来校の留学生がバディに

(工)留学・交流委員会(教職員)の業務

留学・交流委員会は8名の教員、教務副主任、3名の職員で構成される。2024年度は訪韓・訪台修学旅行の再開が象徴するように、来校および派遣プログラムがコロナ禍前の状況に戻る感触を持った。そのため2021年からの実践を踏まえ、定型化されつつある業務への対応は8名が適宜分担できるよう、年度はじめに1年間の業務計画を立てた。またプログラムに応じて教務室、事務所、保健室、生徒寮関係者、学年団、留学支援団体と連携し、留学・交流行事の運営の負担が特定の少人数に集中しないように要所要所で連絡を取り合った。今年度は保護者の会幹事さんからも運営上の人的支援をいただくことができた。

中長期留学生の受け入れについては派遣団体の努力で日本語力が高い生徒が選抜されてきたこともあり、多様な教科の組主任のクラスで受け入れられている。寮主任と寮バディの尽力もあり、「自分のクラスに留学生が来てほしい」と生徒からアピールが来るほどになっている。

当委員会の業務は以下の3種類に分類できる。

A 中長期留学生の受け入れ

受け入れの受諾と条件の確認、生徒寮関係者との連絡、受け入れ学年の委員会案提示、受け入れ開始時のアレンジ、受け入れクラスの組主任とアカデミック・アドバイザーとの懇談、留学生の学校および寮生活への適応への目配りと助言、定期試験および学校行事への参加での関係者との連携、留学終了時のアレンジ、荻野奨学金の活用

B 海外派遣プログラム関連

派遣生徒選出の条件および業務分担の協議、派遣生徒選出業務、(必要に応じて) ホスト校・旅行社との連絡・渡航準備支援、(必要に応じて) 参加者への事前事後ガイダンス・参加レポート提出要請、教諭会資料・公欠願等の目配り

C 来校交流プログラム関連

委員会担当業務について関係者（教務・学年・プロジェクトリーダー等）との懇談・業務分担、（必要に応じて）来校交流企画立案・担当者決め・諸事手配など、生徒リーダー・バディの募集・事前指導など、経費の出所確認と管理、（必要に応じて）教諭会資料・公欠願等の目配り

委員会での協議は内容とタイミングに応じて対面協議とメール協議を使い分けた。今年度の主な議題は以下の通りである。

- 第一種および第二種留学の条件について、教務からの諮問に対する答申作成
- 台中一中来校交流の企画案協議
- Kia Ora Program 派遣生徒選考の条件について再協議
- Hana Academy Seoul からの交換留学生受け入れ企画案・運営分担協議
- 当委員会の業務を円滑に引き継いでいくための提案を教務に提出

2025 年度は中期留学生受け入れと来校交流プロジェクトがさらに増えることもあり、教員メンバーを増員することになった。また Hana Academy Seoul の短期留学受け入れを現在の 1 月から 1・2 学期に移動が可能か、同校および日本側関係校と協議・連携していくことになった。

(才) 在校生の長期留学

在校生の留学状況としては、第 1 種留学（休学を伴う留学）で 2 名、第 2 種留学（休学を伴わない留学）で 1 名が留学中である。留学先と留学期間は以下の通りである。

- 第 1 種留学 アメリカ合衆国（2024 年 9 月～2025 年 3 月）1 年生：男子 1
- 第 1 種留学 アメリカ合衆国（2024 年 9 月～2025 年 6 月）2 年生：女子 1
- 第 1 種留学 シンガポール（2025 年 1 月～2025 年 12 月）1 年生：女子 1
- 第 2 種留学 カナダ（2024 年 8 月～2025 年 6 月）1 年生：女子 1

2.5.4 海外交流プログラム

(ア) ミニシンポジウム「国際交流へのいざない」開催

これはコロナ禍が始まった 2020 年、授業も全てオンラインだった時期に、本校が国際交流に熱心な学校と思って入学した生徒が多いこと、生徒たちの国際交流への興味をつぶしたくないことから、開催したイベントである。その後、新入生が充実した学校生活を送るために予めイメージしておいてもらうことが効果的であること、保護者の方の理解につながることから、継続して開催している。

今年度は新入生を主対象に 3 月 27 日（水）に実施した。どうせならば学校の様子を理解してもらうため、保護者の参加も認めたと考え、19 時～20 時の時間帯で Zoom により実施した。在校生・新入生・保護者を含め 180 人が参加した。

(イ) ICRF(International Collaborative Research Fair)2024²

このイベントは、立命館高校が主催する共同研究を必須としたオンラインの高校生科学シンポジウムであり、海外 8 カ国から 19 校、国内 22 校が参加し、海外校と国内校がペアリングの上で共同研究テーマについて 8 ヶ月取り組んだ成果を、2025 年 1 月 11 日（土）に発表した。また、連携校 6 校が夏に台湾とタイに分かれ、対面での共同実験を実現した。

本校は 2 名の生徒が参加し、台湾高雄市立高雄高級中学の生徒とともに「液体の落下時のハネ」について成果を発表した。

(ウ) JSSF(Japan Super Science Fair)2024

このイベントは、立命館高校が主催する世界最大規模の高校生国際科学シンポジウムであり、今年度は世界 20 カ国から 31 校、国内 12 校の生徒教員が参加し、11 月 2 日～6 日の日程で立命館高校・立命館大学琵琶湖草津キャンパスを舞台に開催された。

本校からは 2 名の生徒が、運営スタッフ・発表者として参加した。稲穂祭が重なったため、参

² 50p にも関連記事を記載。

加期間は 11 月 4 日～6 日に限定された。

(工) Singapore National Junior College (NJC) との交流

NJC とは 2007 年姉妹校の MOU を締結して以来、10 人程度の生徒の相互訪問を行っている。共同研究を軸としていることが特徴である。

今年度は 8 月 6 日～12 日の間、10 名が NJC を訪問し、交流した。また、11 月 8 日～14 日の間、NJC 生徒 10 名教員 2 名を受け入れた。

(才) Thailand Mahidol Wittayanusorn School (MWIT) との交流

MWIT との関係は 2005 年に始まり、2015 年から 10 名程度の生徒の相互訪問を行っている。今年度は、10 月 14 日～20 日の間、10 名の生徒 2 名の教員を受け入れ、2025 年 1 月 25 日～2 月 3 日の間、10 名の生徒が MWIT を訪問した。

(力) 韓国セロナム高校との学術交流

2021 年に新しい試みとして始まった韓国テジョン市のセロナム高校とのオンライン学術交流を発展させ、今年度は対面による学術フォーラム開催を行うこととなった。

2024 年度は本学院生が訪韓し、2025 年度にセロナム高校の訪問団を本学院で受け入れ、それぞれの学校で学術フォーラムを開催することとなった。学術フォーラムの開催にあたっては、昨年度までの内容をベースに、両国の参加生徒・教員により目標や進行方法等を協議しながら決定していく。テーマは持続可能な開発目標 (SDGs) に関する日韓両国の課題とし、本学院側から 10 名、セロナム高校側から 15 名が参加し、共同研究をすることになった。使用言語はすべて英語とした。

4 月に参加生徒を募集し、選抜した 10 名の生徒を 5 チームに編成した。セロナム高校側でも 3 名ずつ 5 チームに編成され、日韓のチームが共通の 5 テーマで研究を進められるようにした。各チームの生徒たちはチームごとに月例ミーティングを重ねながら研究を進め、オンライン (ZOOM) による中間報告会を行い、7 月 17 日～20 日の日程で韓国・テジョンを訪れ、セロナム高校で開催された学術フォーラムに臨んだ。

セロナム高校では、学術フォーラムの他にも環境施設へのフィールドワーク、自然と調和した伝統家屋の見学、文化交流や調理実習などもあり、非常に充実した交流が行われた。生徒は 2 泊のホームステイも経験し、相互理解を深める機会となった。

これまでオンラインによって続けられてきた交流が、初めて対面による交流となったことにより、非対面では得られない様々な収穫を得ることができた。特に、ホームステイにより韓国の友人と家庭で寝食をともにしながら生活した経験は、参加した生徒の記憶にも深く刻まれたものと思われる。

次年度においては、本学院でセロナム高校を受け入れ、ホストとして学術フォーラムを開催することとなる。日程調整や事前準備などの課題も少なくないが、これまで継続してきた交流の蓄積を活用し、相互理解を深め、学術的にもより質の高い研究発表が実現できるような計画が求められる。

2.6 高大一貫教育

2.6.1 学部説明会

第 2 学年の生徒全員を対象に早稲田大学全ての学部の説明会を実施した。6 月 1 日（土）に早稲田キャンパスを訪問した。目的は、自身の高校生活の意義を見つめ直すことや、ミスマッチの無い進路選択ができるように情報を取得すること、そして何のために大学生になるのか深く考える機会を持つことである。生徒からは、学部の教育内容・特徴を十分理解し目標設定・進路選択へ繋げる機会となったとの感想が寄せられた。

<6 月 1 日（土）早稲田キャンパスにて実施>

法学部、文学部、文化構想学部、教育学部、政治経済学部、商学部

期間理工学部、創造理工学部、先進理工学部、国際教養学部

<9 月 19 日（木）本庄キャンパスにて実施>

社会科学部、スポーツ科学部、人間科学部

また、学部説明会は本学院が計画実施しているイベントであるが、学部側からも積極的に学部理解を深めることを目的として、本学院に向けた説明会が開催されている。2024 年度は以下の会が実施された。

- ・ 8月26日（月）9月15日（日）「法学部への招待」
学院生・保護者対象
- ・ 9月14日（土）「日本医科大学説明会」
学院生・保護者対象
- ・ 3月8日（土）商学部シンポジウム（希望者向け）

2.6.2 学部開放科目（高校生特別聴講制度）

高校生特別聴講制度とは、大学生と一緒に、早稲田大学の正規授業を受講できる制度である。早稲田大学では、全国の高校生のために、学問への関心や進路決定の手助けになるように、正規授業を高校生へ開放している。

附属校である本学院は、授業料を全額免除になるほか、取得した単位は大学での正規の単位として認定されるため、大学教育の先取りとなっている。

[受講期間] 9月下旬～1月（週1回90分）

[受講費用] 無料（実習を伴う科目は実習料が必要）

[受講場所] 早稲田大学各キャンパスまたはオンデマンド（受講科目による）

2.6.3 安全配慮義務プログラム

「安全配慮義務」の実践プログラムとして5月8日に競技スポーツガイダンス「運動中の事故防止及び緊急連絡体制について」、5月24日に運動部生徒を対象に熱中症対策講座、7月10日に中央消防署より講師を招き、救命講習（AED講習）を実施した。心肺蘇生法やAEDの実践講習において、生徒は熱心に受講し、バイスタンダーとして救助に関わる意識が高まり、良い機会となった。

2.7 生徒指導

2.7.1 生徒指導の方針

本学院の生徒はおおむね高度な学力・理解力を有しており、また生活態度も模範的であり、深刻な生徒指導事案が起こることは稀である。とはいえ、成績不振や遅刻・欠席超過に陥るケースが全くないわけではない。対人関係のトラブル、あるいは日々ハイレベルな競争にさらされることにより精神的な不調を訴えることもある。

いじめや中傷、盜難、SNS トラブルの防止といった従来からの生徒指導目標についても達成できるよう努力を継続した。移動教室での盜難事件防止のための巡回、「いじめアンケート」の実施、集会での講話などを通じ、学院生としての矜持を高めるよう指導に努めた。次年度以降においても、いかにして学院生の満足度を高め、充実した生活を送れるようにするかが問われている。

2.7.2 2024 年度の状況

停学・謹慎を伴う生徒指導案件は年間で3件であった。停学や謹慎には至らなかつたが、交遊関係トラブルに起因する指導案件が目立ち、丁寧なフォローを要するケースが複数みられた。保健室や相談室との連携により、対処を強化していく必要性がある。

また、レポートにおける盗用や生成 AI の使用が発覚し、指導を行ったケースが複数見られたため、不正使用防止の取り組みが来年度の課題となつた。

3. 生徒

3.1 生徒受入（入学試験）

3.1.1 入学試験全般（志願者数、入学予定者数・出身地域別）

- ・ 志願者総数は3,129名であった。一般・帰国生入試においては、東京都で増加した一方、

埼玉県および首都圏外で微減となった。

- ・入学予定者は329名で、男子179名(54%)、女子150名(46%)である。
- ・α選抜では、志願者数が減少した。
- ・I選抜の志願者数は前年度比+18名で、コロナ禍前の水準を回復した。
- ・学院説明会は7月・9月の2回、対面とオンラインの併用で開催した。
- ・出身地域別の入学予定者数は下表のとおり。埼玉県で40%台を回復した。

全体	埼玉県	東京都	神奈川県	千葉県	群馬県	他道府県	海外
2024年	118	104	23	12	17	21	34
2025年	136	90	19	21	17	13	33
	41.3%	27.4 %	5.8 %	6.4 %	5.2 %	4.0 %	10.3 %

3.1.2 広報・学校説明会

- ・学院説明会は対面とオンラインの併用で行い、遠方に住む受験生・保護者にも、本学院の情報にアクセスする機会を増やすことができた。
- ・海外在住者対象の説明会を6月～8月の3日間、計5回実施した。学院長による説明、模擬授業、学院生による紹介、キャンパス見学で構成した。
- ・12会場13日間の外部説明会・相談会に参加し、講演および個別相談を行った。

3.1.3 入試実施体制

一般入試の受験者数が高止まりしている。採点作業の一層の効率化が求められる。

3.1.4 入学試験

(ア) 一般入学試験・帰国生入学試験

志願者数は一般2583名、帰国生179名で、合格者は一般男子458名、一般女子189名、帰国生男子39名、帰国生女子22名となった。

(イ) α選抜(自己推薦入試)

志願者数236名で、合格者は男子48名、女子32名となった。

(ウ) I選抜(帰国生自己推薦入試)

志願者数90名で、合格者は22名となった。

3.1.5 指定校推薦

入学予定者数は、男子14名、女子27名となった。

3.2 入学決定者の集い

2月22日(土)に実施した。教員からの挨拶、学院生による歓迎コンサート、模擬授業、校歌指導および応援部からのエールで構成した。

参加者アンケートでは、大多数の入学予定者から、本学院への期待が一層ふくらみ、探究的な学習への意欲が増したという回答を得た。

4. 生徒への配慮

4.1 奨学金

2024年度奨学金の状況は以下の通りである。

奨学金名	受給者数
茂木本家教育募金	1
埼玉県高等学校等奨学金	8
東京都育英資金	1
あしなが育英会	2
群馬県教育文化事業団高等学校等奨学金	1
加藤山崎奨学金	1
正覚会奨学金	1
公文公記念奨学金	1

弘済会奨学金	1
大隈記念	8
小野梓記念	13
早稲田カード	3
早大生協給付	1
校友会給付	4
本庄高等学院	3

4.2 保健室

4.2.1 健康診断

生徒定期健康診断：4月18日（木）実施

感染対策を講じた上で、1時間目から4時間目にかけて全学年実施した。欠席等の未受診者には後日実施し、全生徒が実施できた。

4.2.2 健康相談

内科（婦人科）、眼科、耳鼻咽喉科、歯科、整形外科の各校医等による個別健康相談を実施した。今後も生徒が積極的に相談できるよう、タイミングや周知の方法に工夫が必要である。

4.2.3 感染症対策

インフルエンザは2学期末から流行したもの、3学期に入って学校全体で大きな流行になることはなかった。昨年同様、流行期が早くなることを見越し、寮生への予防接種（任意）時期を早めたことは有効であった。新型コロナウイルス感染症は、年間を通して感染が報告されているものの、大きく流行することはなかった。前年度と比較すると、今年度は感染拡大により一斉休校することなく、学級閉鎖を1クラス実施したのみであった。体育祭や文化祭等のイベント後の感染拡大の防止については、引き続き課題であり、イベント前から徹底した対策をする必要がある。

4.2.4 カウンセリング

週2回水曜土曜の午後に相談室を開室し、大学学生相談室所属のカウンセラーが生徒や保護者、教職員の相談に対応している。今年度は、前期よりも後期の方が相談件数が増加する傾向にあった。また、前年度と比較すると希望日に予約が取りやすくなった。

4.3 リハビリコンディショニングルーム

運動部サポートの一環として、トレーナーによるスポーツ障害相談を実施した。個別の運動障害に対し丁寧にリハビリ・トレーニングを指示して成果を得た。次年度は回数を増やし、多くの生徒が利用できるように努めたい。

4.4 共済見舞金

本学院では生徒の疾病・不慮の事故・災害等による医療費を相互扶助によって補助し、保護者の経済的負担を軽減することを目的に、独自の共済制度を設け、全生徒から年額5,000円を徴収している。2015年度から、より公平でわかりやすいシステムを目指し、現行制度の運用を開始した。これにより、本規程の所管箇所である早稲田大学学生部が大学生を対象に運営する学生健康増進互助会の基本的な考え方やルールに沿った医療給付制度となった。

2018年度、2019年度と2年続けて赤字の收支決算と等の制度改革を実施している。過去6年度分の支給実績は次の通りである。

年度	2019	2020	2021	2022	2023	2024
支給人数（延べ）	891	451	423	373	236	129
支給人数（実数）	247	136	136	110	84	46
支給上限額到達者	11	4	5	2	3	3

支給金額（円）	4,910,736	1,915,688	1,925,249	4,079,574	959,583	3,181,794
---------	-----------	-----------	-----------	-----------	---------	-----------

なお、日本スポーツ振興センターをはじめとする他の保険制度を利用することでも十分な保証が得られるようになった昨今の状況に鑑み、本制度は2024年度をもって廃止することで決定している。

4.5 学校安全管理

4.5.1 安全管理体制

本学院のキャンパスは浅見山とよばれる丘陵地にあり、85万平方メートルにおよぶ広大な敷地を有している。古墳群が点在し、オオタカ等の野生生物保護のため、環境保全の必要にも迫られている。そのような特殊な事情により、学校を外部から物理的に遮蔽する塀や門を設けることができない。そのため、日直にあたる教員が校地を巡回し不審者の侵入防止・発見に努めるほか、下校時刻の遵守指導を行っている。

これに加えて、外部委託によるキャンパス管理室を設置し、24時間体制で巡回を行うなどセキュリティを強化している。キャンパス内外をつなぐ出入口や建物の開口部には防犯カメラを設置し、校舎にも最新の入退出管理機器を設置するなど監視体制も整えている。2023年度には不審者の侵入を防ぐために、約2kmにおよぶ柵を設置して、囲繞地化を行った。

本庄キャンパス全体としては、労働安全衛生法第19条第1項に規定される安全衛生委員会が設置され、本学院を含むキャンパス内各箇所から委員が選出されている。委員会は毎月定例で開催され、キャンパス内の安全衛生全般について報告や確認を行なっている。

また、4月には消防署の協力により防災訓練を実施し、災害発生時の避難経路の確認、防災意識の高揚を図った。

4.5.2 交通安全指導

自転車による通学経路を指定し、指導を続けている。具体的には4月、9月、1月に早苗寮前、高崎線歩道橋南側ロータリー、稲稜ホール入口にて自転車走行の指導を行った。電車通学の生徒については、電車通勤の教員が中心となって生徒の乗車状況を確認し、ホーム上の危険防止（歩きスマホの指導）等にあたっている。昨年度から、ヘルメットの着用が努力義務化され、本学院でも積極的な着用を呼び掛けた（原則は着用と指導）。

4.5.3 防災訓練

全校生徒・教職員を対象とした防災訓練を毎年に実施している。2024年度は4月25日（木）に火災が起こったことを想定し、消防署の指導による消火訓練なども含め実施した。

5. 生徒進路

5.1 進学学部

5.1.1 学部決定の方法

（ア）総得点方式

成績の上位者から順番に、希望の学部学科に推薦する。

（イ）G選抜方式（2023年度で終了）

学部受け入れ枠の最大10%を上限として、学業成績だけでなく思考力や判断力、意欲、主体性など多面的評価によって学部推薦を決定する。本年度は1名が入学した。

（ウ）日本医科大学への推薦

推薦条件を満たした希望者から、成績や諸活動および意欲などを総合的に評価し推薦者を決定する。本年度は2名が入学した。

2024年度入学推薦枠数/2024年度学部進学者数(学部・男女別)								
学部	学科	専修	2024年度入学推薦枠数		2024年度学部進学者数			
			学科定員	学部合計	計	男子	女子	学部合計
政治経済学部	政治学科		25(±3)	73	25	6	19	73
	経済学科		33(±3)		31	8	23	
	国際政治経済学科		15(±3)		17	7	10	
法学部			44	44	44	20	24	44
文化構想学部	文化構想学科		21	21	21	10	11	21
文学部	文学科		16	16	16	8	8	16
教育学部※	教育学科	教育学専修	5	40	2	1	1	28
		教育学専攻	生涯教育学専修		2	2	0	
			教育心理学専修		2	1	1	
		初等教育学専攻			2	0	2	
	国語国文学科		8		3	2	1	
	英語英文学科		8		1	1	0	
	社会科	地理歴史専修	6		6	6	0	
		公共市民学専修	7		4	3	1	
	理学科	生物学専修	2		2	1	1	
		地球科学専修	2		0	0	0	
	数学科		4		1	0	1	
	複合文化学科		4		3	3	0	
商学部			35	35	35	23	12	35
基幹理工学部 (2年進級時に学科選択)	Mathematical Sciences			40	0	0	0	26
	学系Ⅰ		10		1	1	0	
	学系Ⅱ		28		18	14	4	
	学系Ⅲ		7		7	5	2	
創造理工学部	建築学科		12	35	8	3	5	26
	総合機械工学科		7		2	2	0	
	経営システム工学科		7		7	5	2	
	社会環境工学科		5		5	4	1	
	環境資源工学科		4		4	3	1	
先進理工学部	物理学科		4	34	0	0	0	18
	応用物理学科		5		2	1	1	
	化学・生命化学科		3		3	2	1	
	応用化学科		6		1	1	0	
	生命医学科		3		3	0	3	
	電気・情報生命工学科		13		9	8	1	
社会科学部※	社会科学科		20	20	20	3	17	20
	TAISIプログラム		(2)★		0	0	0	
人間科学部※	人間環境科学科		4	12	0	0	0	1
	健康福祉科学科		4		0	0	0	
	人間情報科学科		4		1	1	0	
スポーツ科学部	スポーツ科学科		6	6	1	0	1	1
国際教養学部	国際教養学科		13	13	13	5	8	13
日本医科大学医学部			2	2	2	1	1	2
合計			391		324	161	163	324

6. 教員の活動

6.1 教員の研究活動

6.1.1 特別研究期間

本校では毎年3名を上限に、最長1年間の特別研究期間（サバティカル）を取ることができます。本年度の希望者は3名であった。

6.1.2 研究紀要

本学院専任教員、非常勤講師等が執筆した研究論文や調査報告を掲載し、年1回刊行している。本度は研究紀要第43号を発行し、論文3本と退職教員2名の略歴・業績を掲載した。

- ・英国パブリックスクールの外国語教育
- ・Banachlimit duality mapping

- ・『狹衣物語』 覚書

6.1.3 教員の研究成果

【課題研究】

- ・早稲田大学特定課題（研究基盤形成） 2024C-278 「高等学校での探究型学習における数学的知識の学習過程の分析」
- ・早稲田大学特定課題（研究基盤形成） 2024C-277 「雇用機会均等法を公民科でどう教えるか」
- ・早稲田大学特定課題（科研費運動型） 2024Q-029 「民主主義社会を支える表現の自由をどう教えるか」
- ・早稲田大学特定課題（研究基盤形成） 2024C-622 「宇宙線透視を題材とした高校生の学際的探究活動プログラムの開発」
- ・早稲田大学特定課題（科研費運動型） 2024R-053 「高校生による古墳の宇宙線透視プロジェクト「墳Q」」
- ・早稲田大学特定課題（科研費運動型） 2024R-054 「超幾何モチーフの L 関数の特殊値に関する研究」
- ・早稲田大学特定課題（研究基盤形成） 2024C-280 「超幾何モチーフの L 関数の特殊値に関する研究」
- ・早稲田大学特定課題（研究基盤形成） 2024C-276 「墳墓画像による西涼政権の研究」
- ・早稲田大学特定課題（研究基盤形成） 2024C-624 「ジョセフィン＝バトラーの公娼制度廃止運動についての諸研究」
- ・早稲田大学特定課題（研究基盤形成） 2023C-279 「準ホップ代数のハイゼンベルグダブルの五角関係式について」

【論文】

- ・成瀬政光, 宮川健. 「探究型学習の設計に向けた基本認識論教授モデルの構築：定積分についての基本認識論モデルと授業実践をもとにして」. 全国数学教育学会誌『数学教育学研究』, 30(1), pp. 31-46. 査読あり
- ・斎藤七菜子・高井寿文 2024. 高齢者による洪水ハザードマップ基図の読図と地図表現. 埼玉地理(44) : 1-10. [査読あり]
- ・三枝亮也「19世紀末～20世紀初頭におけるメゾン・ド・ランデバーとその議論 —1904年パリ市議会の報告書を手掛かりに—」『史観』第190号、2024年、66-87頁 [査読あり]
- ・松田英里「名譽の負傷者」の社会復帰」北村陽子編『職業教育とジェンダーの比較社会史』昭和堂、2025年
- ・Yusuke Nemoto, 「Regulator of the Hesse cubic curves and hypergeometric functions」, manuscripta mathematica, 175(3-4) 813-840 [査読あり].
- ・Yusuke Nemoto, 「Non-torsion algebraic cycles on the Jacobian of Fermat quotients」, Canadian Mathematical Bulletin, 68 (1), 60-72 [査読あり].
- ・Yusuke Nemoto, 「L-function of CM elliptic curves and generalized hypergeometric functions」, International Journal of Number Theory, to appear [査読あり].
- ・林山まゆり「中世真言教学における『般若心経秘鍵』理解—「顕中之秘」の解釈をめぐつて—」大久保良峻先生古稀記念論集刊行会『大久保良峻先生古稀記念論集 天台学と諸思想』、法藏館、2025年
- ・上田太郎「子どもを生む技術とルール」岩崎正洋編著『政治に正解はあるのか』日本経済評論社、2025年

【書評】

- ・三崎良章「関尾史郎著『周縁の三国志－非漢族にとっての三国時代』東京・汲古書院、2023」『唐代史研究』27、2024

【口頭発表】

- ・ 成瀬政光, 宮川健. 「探究における数学的知識の深まりについての考察：モデルとシステムの視点から」. 全国数学教育学会 第60回研究発表会, 奈良教育大学, 2024年6月23日.
- ・ Yusuke Nemoto, 「Non-torsion algebraic cycles on the Jacobian of Fermat quotients」, L-functions and Motives in Niseko 2024, Setsu Niseko and Niseko Residents Center, 2024年9月15日-20日
- ・ Yusuke Nemoto, 「Non-torsion algebraic cycles on the Jacobian of Fermat quotients」, International Workshop on Motives in Tokyo, 2025, The University of Tokyo, 2025年2月17日-20日
- ・ Yusuke Nemoto, 「Non-torsion algebraic cycles on the Jacobian of Fermat quotients」, 2025年早稲田整数論研究集会 2025, 早稲田大学, 2025年3月13日-15日
- ・ 根本裕介, 「Dwork の p 進超幾何関数の変換公式について」, プロジェクト研究集会 2024, 伊豆長岡温泉ホテルニューアルプス, 2025年3月19日-21日
- ・ 太田洋平. 「On the quantum groupoid structure of the Heisenberg double of $U_h(b+)$ 」, Toyama Workshop on Quantum Groups and Related Topics 2024, 富山大学, 2024年9月14日-9月16日
- ・ 大塚未来 「素粒子物理学分野への理解と興味促進の為の高校における活動実践」 日本物理学会 2025年春季大会 20pN1-5
- ・ 三崎良章「壁画墓から見える魏晋十六朝時代の河西」早稲田大学東洋史懇話会第50回大会 2025年3月22日

6.2 社会活動

6.2.1 学会役員

- ・ 物理教育研究会 運営委員
- ・ 物理教育学会 編集委員
- ・ 映像メディア英語教育学会 専務理事（会員管理担当）
- ・ TALK（田辺英語教育研究会）研究企画委員長

6.2.2 学外委員

- ・ 本庄市行政不服審査会委員
- ・ さいたま市商業等振興審議会委員

6.2.3 学外講師・出張授業等

- ・ 共立女子大学 非常勤講師
- ・ 中央学院大学 非常勤講師
- ・ 共愛学園前橋国際大学 非常勤講師
- ・ 金沢大学 非常勤講師

6.2.4 教科書等の執筆

- ・ 「わたしたちの地理総合 世界から日本へ」文部科学省検定教科書 高等学校 地理歴史科用（二宮書店）執筆者
- ・ 「わたしたちの地理総合 世界から日本へ」文部科学省検定教科書 高等学校 地理歴史科用 教師用指導書朱書き編（二宮書店）執筆者
- ・ 「情報I」、高等学校情報科教科書、日本文教出版 執筆者
- ・ 「物理基礎」「物理」文部科学省検定教科書（実教出版） 高等学校理科教科書 執筆者
- ・ 「物理基礎」「物理」文部科学省検定教科書（実教出版） 高等学校理科教師用指導書 執筆者

6.2.5 外部資金の獲得

- ・ 日本学術振興会 科学研究費助成事業 奨励研究「高等学校「数学III」での探究型学習にて数学的知識の学習の必要性を伴う条件の考察」(24H02434). 260千円
- ・ ベイシア 21世紀財団助成金（囲碁将棋部） 200千円

6.2.6 その他

- ・ こども大学本庄 学長

7. 教育研究施設

7.1 学内施設

7.1.1 教室

教室は普通教室 23、ゼミ室4、理科実験・講義室 5、情報処理室2、美術室 1、体育講義室 2、地理演習室 1、音楽教室1、家庭科調理室1、メディアルーム1、CALL教室 1、大教室1 で構成され、各教室にはIT機器とスクリーンが設置されている。

7.1.2 稲稜ホール

稻稜ホールは約400席のキャパシティを持ち、学年集会や、各学年対象の健康教育講演会、外部有識者による特別講演会の会場として利用される。その他、音楽の授業やプラスバンド部・グリー部の活動、稻稜祭をはじめとするイベント、演劇部・軽音楽部等の公演会場として常時利用される。また、学外の機関の利用にも供している。

上記を含め年間の施設利用回数は、2023年度は100回を超えており、本学院の教育活動上極めて重要な役割を果たしている。

7.1.3 CALL教室

PC教室に隣接した46名対応の教室である。教卓周辺はスクリーンを使った発表に適した広めのスペースがあり、2名1組の机にはPC、カメラ、マイク付ヘッドホンが備わっている。授業の展開に応じてアクティブラーニングや音声・文書ファイルの配布と回収が可能である。放課後は事前予約制で、発表リハーサルや課外講義、説明会や始業前30分間の「英語朝練（チュートリアル）」、各種ワークショップにも活用されている。

7.1.4 コンピュータ・インターネット環境

PC室 2 室 (46 名対応) で多様な授業や課外活動を展開している。PC室は教科「情報」、情報系の選択科目以外に、情報環境を必要とする様々な教科で使用され、また、休み時間・放課後は生徒に開放され、創作活動・検索活動に役立てている。また全ての教室に LAN の情報コンセントとプロジェクター・スクリーン・書画カメラが設置されている。また校内すべての場所で WIFI が使用でき、すべての教室に情報コンセントが設置されている。生徒も常時、ノート PC やタブレット、スマホ等でインターネットへの接続が可能である。

このような環境のため、ノート PC やタブレットを持参する生徒が増えている。校内の至る場所で課題や調べ物に役立てている。ネットワークの帯域幅にもストレスはない。

将来的には PC 室は、コンピューターをすべて取り外し、グループ学習などに使用できる多目的ホールに改修の予定である。これに伴い、現在 BYOD(Bring Your Own Device)に完全移行を済ませている。

7.1.5 体育館

バスケットコート 2 面のメインアリーナと、ダンスや卓球、県道などができる多目的ホールやランニングトラックと、部室やトレーニング室、シャワールームが併設された施設である。冷暖房も完備されたため、より一層充実した授業や部活が実施できている。雨天時も 3 クラス同時展開が可能のため代替種目の実施も可能となった。また、WiFi を活用して映像を見ながらの授業展開が可能となった。

7.1.6 共通教室棟体育館

主に雨天時の体育や、水・土曜日の部活動で使用申請を行い、活用している。

7.1.7 サッカー場

サッカーコート1面を十分に確保できる広さであり、それを活かしたサッカーの授業展開が可能である。授業や球技大会等の行事、クラブ活動と年間を通しての使用頻度は非常に高い。水はけは良好で、午前中降雨があっても午後には使用できる。

7.1.8 ラグビー兼陸上競技場

陸上競技、ラグビーの授業展開が十分にできる広さである。体育祭、稲穂祭、球技大会等の行事、また災害時の第一避難として定めており、その使用頻度は高い。クラブ活動では、陸上部、ラグビーパークが使用している。400m 6 レーンの充実したトラックに加え、幅跳び用ピット、高跳び用マット、投擲用サークルと他種目に取り組める充実した環境である。

7.1.9 野球場

野球部の活動以外では、授業での使用頻度も高い。主にソフトボール、ゴルフの授業で使用している。外野は天然芝で両翼 100m の大きな球場は、大雨の時には貯水池になる。

7.1.10 テニスコート

テニスコート6面（クレー4面・砂入り人工芝2面）は、テニスの授業と、クラブ活動では硬式テニス部とソフトテニス部が共用している。

7.1.11 図書室

図書室を頻繁に利用する生徒は少しずつ増えていると思われるが、より多くの生徒に図書室を有効活用してもらえるよう、本学院図書委員会編「図書だより」（年1回発行）で生徒によって紹介された図書を特設コーナーを設けて展示紹介している。

元衆議院議員の河野洋平氏より書籍の寄贈があり、特設コーナーを設けている。

今後も学内関係箇所と連携しつつ、所蔵資料の充実、図書室内の環境整備などに努めたい。

7.1.12 食堂

食堂はホールとパンショップ（購買）から構成されている（運営は早稲田大学生協に委託）。座席数は、約400席。4人掛け、6人掛けの他に、1人掛けのテーブルも用意し、多様なニーズにこたえるように改善した。

また、生協のご厚意で、生協会員には食事代の割引や、書籍の割引サービスがある。

食事の時間外では学年集会や研修会、部活動保護者会などで使用されている。今年度は、台中一中来校交流会場として活用したほか、「大久保山学」「コミュニケーション英語III」の授業内活動（ポスターセッション）でも使用した。

7.2 スクールバス

6台で運行シフトを作っている。朝の本庄発バスが込み合う時間帯は台数も多く手配しているため、バスに乗り切れない生徒はほとんど見られなかった。

一方で、朝、通学時に座りたい生徒がバスを見送り、バス停が先頭から詰まってしまうケースが見られたことや、最終下校時刻のバスで、バスの出発時間を過ぎてからも乗ろうとする生徒が見られることへの対策が課題である。

また、寄居駅行のバスは、本数が少なく、かつ複数の電車の路線（東武東上線、JR八高線、秩父線）が集まるため、希望する時間の電車に乗れるようなバスダイヤを組むことが難しく、生徒から複数件相談があった。

7.3 生徒寮

7.3.1 早苗寮

今年度は、1学期に新入生歓迎会、2学期にクリスマス会と、2度の寮行事を開催することが

出来た。学年を越えた生徒同士の交流を持つことで、コミュニケーションが増し、普段生活の中で起こる問題や課題解決に繋がる良い機会となった。

居室移動等により生徒同士の交流の機会が増す一方で、就寝や起床への影響も少なからず出ており、より一層寮生一人一人の自主自律が問われる。今後もその部分の成長を促したい。

7.3.2 梓寮

本年度は、9月から3名（台湾から1名、韓国から1名、タイから1名）の留学生が寮生とともに生活をした。

今年度は、9月に花火大会（7月の予定を雨天により延期）、12月にクリスマス会を行い、寮生同士の交流をしていた。また、1月には韓国のハナ高校から短期留学生の受け入れを行った。昨年度に比べて感染症対策に留意しつつも、交流の幅を広げられたと考えている。特に留学生との交流は、寮生にとって大いに刺激になった。

8. 学外との協力・連携

8.1 保護者との連携（保護者の会）

本学院では保護者会を年に2度実施している。第1回目は6月初旬の土曜日放課後に開催する。1年間の学習や行事に対する諸注意が内容の基本である。第2回目は12月の冬季休業に入った最初の日曜日に実施する。クラスや行事の状況報告、進級進学に向けた指導が内容の中心となる。3年生では、ミスマッチのない学部選択に向けた進路指導のため、この保護者会においてクラス組主任との間で三者面談が行われる。

また保護者による組織として、本学院には「保護者の会」がある。PTAとの違いは、保護者の会は、教員がその動きには基本的には関わらずに、会独自に活動していることである。保護者の会の活動は、保護者向けの広報誌の作成や卒業式関連のイベントの実施、また保護者同士の親睦を深めるための企画・実施等である。

8.2 卒業生との連携（同窓会・キャリア教育）

稲穂祭における出展や記念品グッズ作成、卒業生への就職セミナーを実施した。

卒業生との連携としてはキャリア教育の充実が上げられる。凡そ月1度土曜日放課後に実施しているキャリアデザイン講座、毎年9月の2週に渡って実施するキャリアウィークでは、各界で活躍しているOB/OGを講師として招き、職業について講義をしてもらっている。OB/OGにお願いする利点は、高校生活・大学生活が本校生徒とダブるために、どのような高校・大学生活を送り、どのように職業選択を行ったのかという時系列を自分のこととしてイメージしやすいことがあげられる。

8.3 地域との連携、貢献活動

本庄学院は1982年の開校以来、教員の持つリソースや学校設備・器具を用い、地域の人たちに対して講習会や特別講義を実施してきた。本庄キャンパス内に本庄プロジェクト推進室ができてからは、連携を行い、多様な講座を地域に公開している。

8.3.1 地域小学校への総合学習・国際教育支援

2018年度より、教育委員会と連携し本庄市内小学校へ出張授業を行うプロジェクトが開始した。大きく一般的な授業内容を展開する総合学習支援プログラムと、留学生を軸に英語・国際理解活動を展開する国際理解支援プログラムに分かれる。

学校が学校だけで閉じている時代は終わり、多様化・グローバル化の時代の中、学校は教育リソースを学外に求めより効果的で高いレベルの教育を目指すとともに、地域の文化的拠点にならなくてはならないと考えている。

8.3.2 本庄市への協力

生涯教育を目的とした本庄市が主催する市民総合大学、こども大学ほんじょうにも講師・学長の立場で協力をしている。

8.3.3 学校独自のプログラム

本庄学院主催の子ども科学教室を行っている。従来は小学生親子対象であったが、今年度から入試広報戦略の意味を持たせ、募集対象を地域に限定せず、年齢を中学生まで拡大した。広く海外や近畿からの参加者もいた。

8.3.4 河川研究班の活動

河川研究班は2009年より、本庄市内河川環境保護の活動をしている、本学院の有志団体である。2012年からは、同じような活動をしている市内藤田小学校と連携し、年2回の河川調査と総合学習における科学教育指導、河川環境に対する啓蒙活動として3月に市民を対象として川のシンポジウムを開催している。

8.4 早稲田大学・附属校・係属校との連携

8.4.1 Waseda Affiliated Schools` Summit (WASS) の活動

2020年より早稲田大学のもう一つの附属校である早稲田大学高等学院有志との間でWASSの活動を行っている。この活動は、両学院有志10名ほどが「より充実した学院生活」作りの案内をすることを目標としている。具体的には、大学教務部高大接続課の協力のもと、早稲田大学キャンパスツアー、早稲田祭におけるOBOGを招いてのトークセッション、より充実した学院生活作りに向けたワークショップを大学本部で3月17日(月)に実施した。

今後、継続校も含めて広く附属・継続校のプロジェクトにしたいと考えている。

8.4.2 地域創造ワークショップ

昨年度は本庄市を舞台として行った「町おこし」を目的とした起業ワークショップである。今年は、8月17日～18日に本庄市を舞台として、早稲田大学セミナーハウスを会場とし、一泊二日のプログラムとして、本庄学院・高等学院・早実・早稲田撰陵・早稲田佐賀が参加して開催された。

8.4.3 アントレプレナーシップ育成事業

早稲田大学アントレプレナーシップセンターでは、学生の起業家精神を涵養し、イノベーションを生み出す人材を輩出する教育に取り組んでいる。本庄高等学院においても、同センターや本庄市、今年度は日本政策金融公庫の協力を得ながら、高校生がアントレプレナーシップを身に付けるためのプログラムを広げた。スタンフォード大学d-school講師によるワークショップには本学院生徒だけでなく、早稲田実業・早稲田高校、ちょうど本校を訪問していたMWITの生徒も参加した。

- ・ 5月23日（木）日本政策金融公庫によるビジネスプラン説明会
- ・ 7月5日（金）日本政策金融公庫によるワークショップ
- ・ 8月17日（土）～18日（日）地域創造ワークショップ@本庄
- ・ 10月16日（水）スタンフォード大学d.school講師によるデザイン思考ワークショップ
- ・ 2月21日（金）WASEDA-EDGE Demo Day



スタンフォードd-schoolによるデザイン思考ワークショップ

8.4.4 オンラインによる国際部との連携講座「留学のススメ」

2018年度より大学国際部との連携で、特に大学進学後における留学への理解を進めるべく、特別講座を実施している。オンラインであれば保護者の参加も可能であり、対面とは異なる効果があることを感じている。本学院学務係から「高校における留学」、国際部国際課から「大学における留学」の説明を行ったのち、本学院のOBOGによる留学報告とパネルディスカッションを行い、最後に質疑をするという形式である。

2024年度は以下の通り実施した。150名ほどの保護者・生徒が参加し、関心の高さがわかる。

- ・ 6月11日（火）19時～20時

8.4.5 本庄早稲田の杜ミュージアムとの連携プログラム

本庄早稲田の杜ミュージアムは早稲田大学5番目の博物館として、同キャンパス内に2020年10月に開館した。本庄市近辺で発掘された考古学資料とともに、定期的に入れ替えながら早稲田大学所蔵の文化財をテーマ展示している。

2021年度より、本校生徒が学芸員見習いとして休日に、博物館業務の手伝いをするプログラムを開始し、2023年度も継続した。業務は、市民に向けた埴輪作り・勾玉作り・土器洗いなどのワークショップの補助、展示物入れ替えの補助、お客様に対する説明ボランティア等である。

8.4.6 教育学研究科への研究協力

2024年度は、早稲田大学大学院教育学研究科から依頼された3件の研究調査に協力した。

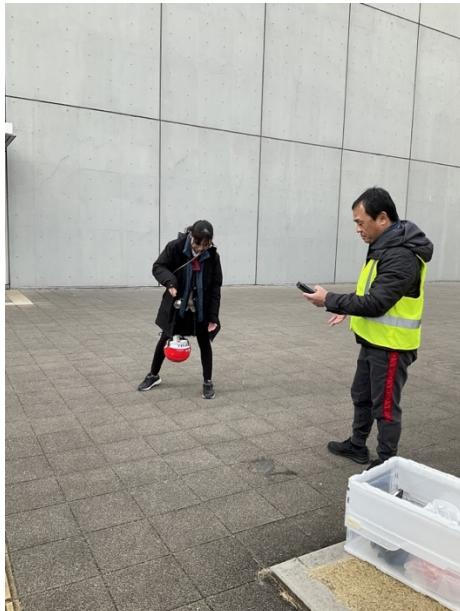
- (1) 英語学習における、スコアレポートが学習方法やモチベーションへ与える影響の調査
授業外の時間に実施されたアンケートやインタビュー調査に協力した。
- (2) ファジィ理論を用いた教材構造分析や受講生のニーズ分析の調査
小テストやアンケートなどをデータとして分析し、教材構築の方法に関する仮説検証を実施する。
- (3) 探究型学習におけるプログラミング学習の可能性の検討
数学の探究型授業において、プログラミングの必要性がどのように発生しうるのかを教授実験を通じて検討する。

これらの研究調査は教諭会にて承認を得た上で実施されている。調査は生徒のプライバシー等に配慮され、得られたデータはしかるべき措置をとり、当該研究室に保管される。こうした

研究調査への協力は、本学院の教員にとっても最新の教育学の知見を得る機会にもなっている。

8.4.7 早稲田大学人間科学学術院とのコラボレーション

12月13日(金)放課後に、早稲田大学人間科学学術院の加藤麻樹教授が来校し、本校生徒に向けた安全人間工学の体験会を行った。研究で用いられるこどもの頭部のモデルを用いて、ヘルメットをつけることで緩和される頭部への衝撃の計測、卵と小さな卵サイズヘルメットを用いて、ヘルメットなどの効果がどれくらい有効なのかを体験した。実際にヘルメットがあったことで事故のとき一命を取り留めたエピソードを交え、臨場感のある体験会であった。



実験の様子

<https://waseda.box.com/s/q4sh990ttvrazebarpi64kmn9rv6vsz3>

8.5 企業との連携

本庄学院では企業との連携プログラムを推進している。インターンシップにつながることと、学校で学んだ基礎知識を現場で実践する際の困難を経験することを期待している。

以下に、2024年度実施プログラムの主なものを紹介する。

8.5.1 ほんじょう FM

2021年度より、地域ラジオ局であるほんじょう FMで、毎週木曜日 17 時～17 時 45 分、「くまごじ」のパーソナリティを務めている。本校の PR、生徒のキャリア教育に役立っていると考えている。

8.5.2 JA ひびきの

2023年度より開始したJA ひびきとの連携プログラムであるが、この年は活動をうまく進められなかった。その反省を踏まえ、2024年度はJAとの交渉を密にし、以下の活動を進めた。

- ・ JAとの対面での会議
- ・ 農園の訪問（梨・サツマイモ）
- ・ 直売所の訪問
- ・ 実際に野菜を使った調理体験
- ・ ポップ・ポスターの作成

8.6 募金

2024 年度の教育支援募金寄付件数は 42 件、寄付金額は 8,240,000 円であり、その他にも本庄高等学院指定寄付や部活動指定寄付を 51 件、3,576,500 円を受け入れた。

今後も引き続き、さらなる募金獲得に向けて今まで以上に幅広く活動を行なう必要がある。

9. 管理運営

9.1 教員

9.1.1 教諭会

定例教諭会が 11 回（入試判定会、卒業・進級判定会は除く）、臨時教諭会が 14 回開催された。臨時教諭会には生徒指導を議題とする会議が複数回含まれている。

9.1.2 各種研修

教員には各種研修が義務付けられている。

情報セキュリティセミナー・ハラスメント防止セミナー・学術研究倫理セミナー・ダイバーシティ&インクルージョンセミナーをまとめた教職員セルフマネージメントセミナーはオンライン上で試験の形で、全問正解の合格が義務付けられている。

2024 年 4 月にハラスメント防止研修会を非常勤講師ガイダンスと同日開催、専任以外の教員も含め、ハラスメント防止等について再認識した。

9.2 委員会

各委員会の検討事項及び取り組みを紹介する。一人の教員が 2 委員会を兼ねることが原則となっている。

委員会	構成	メンバー
教科主任会 委員長：教務担当教務主任	教員 8、教務 2、職員 3	教科主任、教務担当教務、事務長、職員
学年主任会（奨学生、生徒表彰選考） * 委員長：教務	教員 3、教務 1、職員 1	学年主任、生徒担当教務、養護教諭、事務長
生徒活動支援委員会・人権教育委員会（生徒会・稲稟祭・生徒指導、いじめ防止委員会兼務）* 委員長：教務以外	教員 8、教務 2、職員 1	各学年 2、組主任外 3、生徒担当教務、職員
安全委員会（体育行事、保健、その他安全配慮） * 委員長：教務以外	教員 8、教務 1、職員 1	体育 5、養護 1、全教科 3、生徒担当教務、職員
寮委員会 * 委員長：寮主任	組主任外、教務 2、職員 1	組主任外 養護教諭 1、寮主任 2、生徒担当教務 2、職員
広報・出版委員会（社・紀要）* 委員長：教務	教員 1、教務 1、職員 1	全教科 1、教務 1、職員
●入試委員会 * 委員長：入試主任	教員 8、教務 1、職員 2	全教科 1、入試主任、教務担当教務、職員
進路指導委員会（各種セミナー、卒論報告会） * ●委員長：教務以外	教員 8、教務 1、職員 1	各学年 2、組主任外 3、教務担当 2、職員
●留学・海外交流委員会 * 委員長：教務以外	教員 8、教務 1、職員 2	全教科 1、英語 1、教務担当教務、職員
図書委員会	教員 1、教務 1、職員 1	司書教諭 1、職員
学校評価運営委員会 * 委員長：教務以外	学院長、教務、職員 1	学院長、事務長

※ ●は 2 年継続

9.3 教科別教員構成

教員の教科別・年齢別・男女別構成は次の表の通りである。

教科	専任教諭	非常勤講師	合計
国語科	6	4	10
地理歴史・公民科	7	15	22
理科	5	9	14
数学科	7	4	11
保健体育科	5	5	10
芸術科	2	1	3
英語科	8	9	17
情報科	1	1	2
家庭科	1	1	2
第二外国語	0	4	4
養護	1	0	1
合計	42	59	101

9.4 持ち時間数

24年度の教員の平均授業担当時間数は次の通りである。22年度から大きな変動はない。

1. 専任教員 14.2 時間 (除長期欠勤者・特別研究期間適用者・養護教諭)
2. 役職者以外 15.1 時間
3. 役職者(教務) 8.2 時間
4. 非常勤講師 5.5 時間

9.5 教員構成

9.5.1 年齢別構成

資格	人 数	21～30歳		31～40歳		41～50歳		51～60歳		61～70歳	
		人 数	比率	人 数	比率	人 数	人 数	人 数	比率	人 数	比率
専任教諭	42	0	0%	10	21%	17	40%	6	14%	10	24%
非常勤講師	59	29	49%	2	3%	6	10%	12	20%	9	17%
全体	101	29	29%	11	11%	23	23%	18	18%	20	20%

9.5.2 男女別構成

資格	人 数	男		女	
		人 数	比率	人 数	比率
専任教諭	43	32	76%	11	24%
非常勤講師	56	39	71%	17	29%
全体	99	71	73%	27	27%

9.6 事務組織

事務所には、事務長の他、庶務係に専任職員3名、派遣社員2名が、学務係に専任職員2名、嘱託職員1名、派遣社員2名が配置されている。他に、理科室に実験助手(嘱託)2名がいる。

専任および嘱託職員の嘱任、解任、配置転換は大学が行ない、派遣スタッフについては大学が契約窓口となり、人材サービス会社から派遣されている。

なお、施設の管理、スクールバスの運行管理、図書室の運営については業務委託を行なっている。

9.7 生徒の出欠席・成績処理

生徒の出欠席・成績管理のために、早稲田大学オープンソースソフトウェア研究所が開発した

学院向け教務システム「SchoolN@vigator³」を導入している。同システムはリレーショナルデータベース化による情報の一元管理を特長とし、高度なセキュリティ保持や容易なデータ抽出・加工が可能になった。ユーザーインターフェースとしてウェブブラウザが採用されていることも、操作性や利便性の向上に役立っており、特に教員についてはデータの閲覧・編集がインターネット環境さえ整えばどこからでも可能になっている。

今後は、生徒の保健管理や課外活動管理などシステム化されていない事項を含め、ユーザーの希望を取り入れながらシステムの改善に取り組みたい。具体的な運用は以下の通りである。

- ・出欠席管理：科目担当者（教員）が毎时限の出欠席を入力した後、学期毎に組主任が欠席理由、成績通知表用所見を入力する。その他、学校行事など出欠席の一括入力が必要となる例外対応や集計処理は職員が管理する。
- ・成績管理：科目担当者が生徒の成績を入力した後、チェックから確定処理までを教員が行なう。成績通知表・指導要録・調査書等の成績関連帳票の自動出力が可能となっている。進学学部への調査書提出時など一括処理やデータ集計が必要な部分については、職員が編集・管理を行なっている。

9.8 教育実習

2週間（5月27日（月）～6月6日（木））および3週間（5月27日（月）～6月12日（水））の期間で9名の実習生を受け入れた。実習前の打ち合わせ会は4月25日（木）に行った。実習生は教壇実習を行いながら、学校現場の業務の体験に努めた。実習期間中には体育祭や学年行事（3年生向け進学セミナー等）を実施して学校行事運営の実習も行った。教育実習の反省会は2週間および3週間の実習最終日にそれぞれ実施した。

9.9 広報・連絡

9.9.1 学校活動の広報

広報誌として『緑風』を年2回、本庄高等学院が、『杜』を保護者の会が年1回発行している。

『緑風』は、6月と12月に発行している。紙面は教員や生徒が執筆するコラムや行事報告、クラブ活動の戦績報告などで構成されている。

また、『杜』は、保護者向け広報誌である。保護者会広報担当委員会の自主的な取材・編集により、学院施設や生徒行事・トピックの紹介、保護者の会の活動報告などを掲載している。

オンラインでの広報は、学院ウェブサイト（<https://www.waseda.jp/school/honjo/>）を主なツールとして使用している。ウェブサイトでは学院生活に関するニュースや出来事を継続的に発信しており、

トップページの写真やリード文を見るだけで、本学院の最新の動向が伝わるようなページ運用を行っている。

課外活動のページでは、部活動ごとの活動概要（部員数・活動日・実績）を伝えるとともに、独自のWebサイトがある公認団体（クラブ）は、団体独自の情報発信を行なっている。

今やウェブサイトは、学外の方に学校の基本的な情報、必要な手続・書式を得てもらう必須のツールとなっている。入試についても例外ではなく、本学院では入試の出願、合格発表、入学手続きの全てをウェブサイトを使用して実施している。

正確かつわかりやすい情報発信はウェブサイトの必要条件であり、このことに向けての体制づくりは今後も継続的に検討していく必要がある。ウェブサイトの頻繁な更新が課題となっている。

9.9.2 保護者・生徒への連絡・広報

本学院保護者に対して、迅速かつ確実に情報を伝達するため、HotCom Passシステムを導入し、基本的に保護者のメールアドレスを登録している。災害・緊急時の情報伝達のみでなく、日常の事務連絡にも用いることで、保護者への迅速な情報発信を行なっている。

生徒に向けての連絡は、通常はLHRや授業時に行なうことで問題ないが、警報発令時の連絡、台

³ 本庄高等学院用の出欠・成績管理システムである。各担当教員がその都度生徒の出欠や成績を入力し、その内容が指導要録・調査書等に自動的に反映される。

風通過後の学校からの連絡、生徒達に配布している学校生活マニュアル集「学院生活のしおり」によらない緊急連絡などはラーニングマネージメントシステムWaseda Moodleを使って発信・連絡している。

9.9.3 学校に寄せられる情報

学校に寄せられる情報としては、以下の種類がある。

- ・ 警察・消防署・本庄市からの情報不審者や災害状況などに対して注意を喚起する情報が寄せられることがある。必要に応じて、生徒に下校時の注意などを呼び掛けている。
- ・ 市民・公共交通機関利用者等からの情報市民の方、電車の乗客の方から、主として生徒に対する苦情が寄せられることがある。状況を詳しく伺い、必要があれば生徒に注意を与えるとともに、ご指摘いただいた方に対しては真摯に対応するよう努めている。

10. 学校評価

この学校自己評価については、項目ごとに担当者を割り振り、原稿を依頼した。保護者に向けたアンケートは実施できなかったが、学校運営に対する意見・感想を伺う場を保護者会のあとに役員から聴取することができた。

10.1 大学の箇所ごとの自己評価

早稲田大学の各箇所は毎年実施報告と次年度計画を大学にすることが義務付けられている。以下は、大学への報告を兼ねている。

10.1.1 2024 年度自己評価の主な内容

(ア) 入試関連

- ・ 2025 年度入試に向けて

2020 年度以降の入試改革で実現した、一般入試・帰国生入試における願書の Web 化、2 次試験（面接）の廃止、入試会場の一本化（早稲田会場のみ）等を引き続き実施した。男女定員枠の見直しの議論を行った。

- ・ 入試広報の効果的展開

学校説明会については、海外を含む遠方からの参加を容易にすること、本校の情報を継続的に発信するために、2 回の対面開催に加え、オンラインにより実施した。オンライン配信は昨年までは年 3 回、限られた期間内のみの視聴だったが、今年度より年間を通じて配信した。効率よく学院の特色や入試情報を伝えるとともに、在校生や留学生も積極的に協力することで、高校生活を身近に感じられたと考える。また、生徒寮の情報や相談の場を提供し、親元を離れての様々なバックグラウンドをもった生徒との共同生活の雰囲気も感じていただくことができたと考えている。

(イ)教育関連

- ・ カリキュラム改定

本年度は、全学年が新カリキュラムとなった。今年度から 3 年生全員が数学 III を必修とした。また、これまで理工系学部進学の条件として物理と化学の選択を必須としていたが、大学の学部ごとに必修科目に関しての方針が異なることや、生徒の進路選択の要望に応えるべく、生物化学の選択でも理工系学部への進学を許可することにした。この制度を利用した生徒は 14 人と少なかったが、理工系に進む生徒の割合は増加した。

- ・ 卒業論文指導の強化

第 2 学年から取り掛かる長い探求活動の中で、卒論指導とともにライティング、プレゼン教育についても注力した。今後、高大連携や地域連携による課外活動等を通じて関心を

持ったテーマなど、さらに多角的な課題設定も期待される。

・ 学部推薦制度の充実

高大接続の一環で、ミスマッチがなくモチベーションの高い生徒を学部に推薦することを目指し、学部との教育活動の連携や情報交換を密にし、生徒がそれぞれの学部・学科への理解をより深いものにできるよう努力した。大学キャンパスでの学部説明会も実施した。また、第一線で活躍中の社会人等も交えてのキャリアデザイン講座を実施し、学部で何を学ぶか・どんな未来を描くかをイメージできるよう、進路指導の充実を図った。

日本医科大学の学校説明会は5月には3年生対象、9月には1、2年生対象の説明会を日本医科大学で開催した。説明会では学校の紹介に加え、模擬講義等を実施するとともに、医学の道を志すうえでの心構え等の指導も行った。

・ 地域連携プログラムの充実

地元小学校との交流事業（総合的学習の支援）、本庄早稲田の杜ミュージアムでのワークショップ支援、ほんじょう FMでの番組企画・出演等を実践した。とりわけ地元小学校との合同河川調査については、長年の継続的な取り組みが評価され、河川エビの研究及び図鑑「ほんじょうの川のいきもの」発行の活動が「川の日ワークショップ 2025 関東大会特別賞」「いい川・いい川づくりワークショップ全国大会 2024 準グランプリ」を受賞した。

・ 企業連携プロジェクトの推進

企業との連携プロジェクトは、本学院が推進しているアントレプレナーシップ教育に役立つとともに、学校で学んだことの実践の場として経験や技術を深めることに繋がり、社会の抱える問題を知ることになるため、今後とも継続していきたい。

(ウ)国際関連

生徒の海外留学・海外派遣

本学院生の1カ年の海外留学制度に関しては、留学期間1年+本学院での3年という従来型の「第1種留学」に加え、2018年度に1年間留学をしても高校3年間で卒業できる「第2種留学」制度を作った。また2023年度から2024年度にかけて留学や復学を認める場合の条件を再吟味した。2024年度は「第1種留学」により3名、「第2種留学」により1名が1か年の海外留学に旅立った。

2022年度末から開始したニュージーランド短期留学プログラム Kia Ora Programは春休みと夏休みの年2回派遣という形が定着した。2024年度の短期の海外派遣では、協働研究や高校生国際フォーラムが核となるシンガポール研修、タイ研修、セロナム高校フォーラム、HANA高校国際フォーラムに参加した。またHANA高校との短期交換留学も実施した。

留学生の受け入れと留学期間中の支援

留学生の受け入れ数とそれぞれの活動の様子については、2.5.3 留学の項に詳細を述べた。留学生の学習支援には早稲田大学への指定寄付を原資とした「荻野奨学金」を活用し、留学生がより多くの学院生とも交流できるような質の高い体験を増やす努力をしており、大学内でも活用の優秀事例として紹介されている。

大学進学後の留学促進のために

国際化が進み、早稲田大学も留学を進めている現在、生徒一人一人が大学生活をイメージするとき、留学は必ず検討すべきプログラムとなっている。特に、就職活動を考えた時、2年次の夏に留学することが求められ、そのためには大学入学後すぐの準備が必要となる。

このようなことを考え、大学進学後の留学を視野に入れている生徒、保護者向けに、国際部・留学センターとの連携による留学説明会を、2021年よりオンラインにより実施している。150名を超える保護者・生徒が参加しており、関心の深さを感じさせる。

修学旅行

2024 年度はコロナ禍前の 2019 年度以来の海外修学旅行の復活となった。4 泊 5 日の日程の中で、韓国コースは安養外国語学校、台湾コースは台中市立台中第一高級中学の協力で訪問交流が叶い、修学旅行がより充実した内容になった。

国際交流プログラム

SSH 指定校時代に培った NJC、MWIT との相互訪問プログラムを進めるとともに、IICC、JSSF、ICRF などのコンテスト・発表会にも積極的に参加した。2023 年度の MWIT との MOU 締結に続き、今年度は長年のパートナー校である台中市立第一高級中学とも MOU と締結して相互交流の機会をより充実させる協議をした。

国内外教育機関連携でのオンライン学習交流プログラム

オンラインの国際関連プログラムは、コロナ禍でも留学や国際交流の意義を伝え、モチベーションを維持してもらうために、組まれた背景がある。アフターコロナの現在も対面交流の時間により濃密にするために、特に事前準備のタイミングでいくつかのオンラインプログラムが実施されている。

- 特に新入生に向けて国際交流の良さを伝えるために、ミニシンポジウム「国際交流へのいざない」を 3 月に開催した。
- Kia Ora Program の募集前の説明会および出発前オリエンテーションは、両学院生徒と保護者、両学院長、実施を担当する Waseda Academic Solution、その他関係者による Zoom Meeting が慣例となっている。
- 韓国セロナム高校で 7 月に対面で実施する学術交流シンポジウムの準備のために 5 月から月 1 回のペースでオンライン研修を実施した。2 校合同の 5 つのグループを作り、SDGs の各テーマについて、問題解決についての提言を目指した打ち合わせと発表準備を行った。

10.1.2 2026 年度計画

(ア) 入試関連

- 願書の Web 化と 2 次試験（面接）の廃止、試験会場の一本化等の影響を分析し、2025 年度入試に活かすとともに、全国・世界から多様で資質の高い生徒を受け入れるため、引き続き入試改革に取り組む。
- 対面に加え、オンラインでの展開を含めた学校説明会や相談会を開催し、地方や海外から多くの受験生が参加できるようにする。また、地元指定校向けの説明会や出前講義にも対応する。早苗寮（男子寮）と梓寮（女子寮）の魅力作りを進め、PR 方法も工夫する。
- 入試定員における男女枠を、男女平等の観点から各入試カテゴリーにおいて同じ数にする。

(イ) 教育関連

・ 多様で資質の高い生徒を受け入れる環境の充実

学びの環境をさらに整備し、生徒同士が議論し、互いに啓発し合えるラーニング・コモンズ的なスペースが必要である。そのため、校内施設の有効活用策を検討した結果、現在デスクトップパソコンがある 2 つの教室から、パソコン室を取り除き、オープンスペースとして活用することとした。また、親元を離れても、安心して充実した学院生活を送ることができる寮を目指し、寮内での談話スペースの確保や独自の地域連携プログラムなど、引き続き魅力的な寮の在り方を工夫する。

・ 教育効果の高いカリキュラムの検討・多様で未来的な教育プログラムの展開

2022 年度からの新学習指導要領実施に伴い、新カリキュラムの整備・点検を継続的に行ってきました。この中では、学部の意見を伺いながら附属のアドバンテージとなる、あるいは学部教育にシームレスに接続できるような授業展開も検討する。

また、コロナ禍中に得た、教育のオンライン展開などで積み重ねた経験とリソースを活か

し、自習課題の充実や、遠隔授業の充実などを図る。

地域連携（貢献）・企業連携・国際交流・研修活動・各種コンテスト参加など多様なプログラムで、本庄学院教育の可能性を広げ、入学した資質の高い生徒の能力や知的好奇心を育成するよう種々の行事を実施する。

- ・ **ミスマッチのない学部進学と将来設計を目指して**

従来の進路指導のあり方を改め、大学生活や将来を総合的に考えた上で、学部選択・留学・就職を考えられるような進路指導を行う。具体的には、学部との教育活動の連携や情報交換を進め、学部説明会のあり方を検討し、キャリア教育同窓会や校友会との有機的な連携も図り、種々の課外講義を実施する。日本医科大学への学校推薦制度については、高等学院、早稲田実業とも連携のうえ、キャンパスツアーや医学系の模擬講義等を充実させる。

- ・ **卒業論文を軸とした論文リテラシー教育の充実**

新カリキュラム導入に際し、論文リテラシー教育をうまく組み込む努力を行うとともに、どの分野の論文でも必要となるであろう統計処理やデータサイエンスに関するコンテンツを導入する。

- ・ **高等学院との有機的な連携と附属生としてのアイデンティティ育成**

高等学院との、今までの連携プログラムを成長させるとともに、新たな協働連携プログラムの検討も進め、附属校生としてのアイデンティティ育成にもつなげる。

- ・ **誰にとっても居心地の良い学校環境の整備**

LGBTqへの配慮を含めた DEI (Diversity (ダイバーシティ、多様性)」「Equity (エクイティ、公平性)」「Inclusion (インクルージョン、包括性)」向上に向けた環境整備、意識づくりを行う。

男女がお互いを労り合える意識づくりを行うとともに、女子トイレへの生理用品配置などの環境整備を行う。

(ウ) 国際関連

- ・ **留学の促進**

1年間留学をしても高校3年間で卒業できる「第2種留学」制度や、Education New Zealand (ENZ)との留学協定を活かし、本学院から海外に羽ばたく生徒の増加をめざす。特に ENZ では個人の目的に沿ったフレキシブルな留学内容がカスタマイズできることが魅力で、その効果が期待される。

- ・ **受入留学生へのプログラム充実**

本学院で受け入れる留学生についても留学中の教育プログラムの充実を検討し、留学生のみならず本校生徒にとっても得るものが多いような形態を目指す。

- ・ **ポスト SSH・SGH のプログラム**

本学院には、長い SSH・SGH 期間中に培われた経験と国内・海外校とのネットワークがあり、SGH 後も国際プログラムをどう継承させていくかの検討を継続する。これまで実施してきた Mahidol Wittayanusorn School (タイ)、Hana Academy Seoul (韓国)、蘇州中学 (中国) などとの生徒訪問・受け入れの交流については、訪問交流にとどまらず、国際シンポジウムの開催等を含め、未来的な国際交流のスタンダードとなるようなプログラムを双方で検討したいと考えている。

National Junior College (シンガポール)との相互訪問交流は先方の事情により、2024年を最後に中止となった。代わりの交流プログラムの検討を行う。

10.2 2024年度学校評価関係者評価会記録

10.2.1 概要

日時：令和7年（2025年）5月10日（土） 15:00～17:00

場所：本庄高等学院応接室

参加者：

評議委員（五十音順、敬称略）

- ・黒岩 智絵子（草津温泉 望雲 女将）
- ・小林 清木（花咲徳栄高校 元校長）
- ・鈴木 啓太（本庄プロジェクト推進室副室長）
- ・徳増 和哉（2024年度保護者の会会長）

本庄高等学院

- ・影森 徹（教諭、教務担当教務主任）
- ・成瀬 政光（教諭、教務担当教務副主任）
- ・進藤 卓（事務職員、事務長）

10.2.2 学校関係者評価・第三者評価

【実施方法】

- ・学校自己評価・関係者評価については委員に事前配布し、ご一読いただいた。
- ・最初に影森より委員に対して、レジュメを基に20分程度、本学院の特色を説明した（説明内容については割愛）
※ 紙面の都合上、本議事録には学院からの概要の説明は記載せず、質疑応答に関してのみ記載する。○⇒委員からの質問、●⇒学院からの回答

◆相互評価について

○授業における生徒どうしの相互評価はどの程度実施できているのか。

●英語のプレゼンテーションでは生徒どうしの相互評価を導入しているようである。総合的な探究の時間のある科目では、成果発表において生徒どうしの相互評価を導入している。もちろん、教師も生徒のプレゼンテーションを評価している。

○生徒が記述した評価も読み込むとなると、教員の負担は大きいと考えられるが、それは大丈夫なのか。

●書かせるものは年に1, 2回で、負担のないようにしている。書かせるとしても、2, 3行にどめている。

●聴衆である生徒が評価をするときにはループリック式としている。評価する側も負担がない。また、こうしたループリックを発表前に提示することにより、どのようなプレゼンテーションがよいものであるのかという指針を生徒へ与えることにもつながる。

●相互評価では、ほかの生徒がつけた評価をフィードバックしてもらえることが重要である。自分に対する評価を見て、生徒はその後の活動に向けた改善ができる。

●生徒どうしの相互評価だけでは、偏りが生じる可能性があるため教員の評価も加え、公平な評価になるようにしている。

○生徒の成績の評価をどのような基準で行っているのか。

●データを分析する委員会（教学支援委員会）を設けていて、エビデンスベースでの議論を行うようにしている。入試改革でも活用している。

◆α選抜入試の活用について

○α選抜入試は本学院を特徴づける入試制度なので、もっと強力に売り込んでも良いのではないか。

- より特徴のある個性を持つ入学者を獲得すべきではないか。
- 評定平均値による基準を重視しすぎると個性的な生徒を獲得することができないのではないか。
- 地方での認知度をあげて、全国から個性的な生徒を獲得すべきではないか。
- 北陸新幹線沿線（軽井沢等）へのリクルーティングの強化も検討している
- 基礎学力を有した特徴のある生徒に入学してもらえる仕組みを考えている。

◆教育学部への進学者が少ない問題について

- 高校現場での教員不足は深刻である。
- 一部の地域では、教員不足で学校が廃校となるといった例も見られる。
- 教育実習生は例年二桁いるが、2025年度は4名しかいない。
- 群馬大学教育学部であっても教員志望者は少ない。
- 本学院の非常勤講師募集に際しても、応募が少なく苦労している。
- 教職はブラックというイメージが先行している。
- 企業の給与や、休日など教員より待遇の良い会社を選ぶ傾向にある。
- 教育実習に取り組んだ結果、やる気をなくす大学生も多い。給与だけでなく、勤務条件、また、学校現場が生徒に気を遣いすぎているといった問題もある。

◆本学院の教員数が少ない問題について

- 同好会であれば学校が責任を回避することができるので、教員の疲弊を防ぐため、部活動と同好会に切り分けて、うまく活用してはどうか。
- 外部指導者との連携は重要。中学高校の部活動の外部委託はなかなか進んでいないので、部活動のスクラップも必要ではないか。
- 高体連も徐々に部活動指導員活用に移行しているが、埼玉県はいまだに指導員ではなく教員の引率を求める傾向が強い。

◆男女比について

- 2026年度募集から男女比を1：1とすることの効果はどのように想定しているのか。
- 東京都は早慶レベルで女子が受験できる高校が少ない。優秀な女子生徒を獲得しやすい状況にある。
- 男女別募集をやめることはできないのか。
- 現行スタッフでは体育等の授業の実施が困難となるため難しい。
- 女子は文科系学部に進学する生徒が多い、大学推薦枠が変更にならないと文系を希望する生徒の行先が無くなってしまうことが想定される。

◆生成AIについて

- 生成AIについてはどのようなスタンスで取り組んでいるのか。
- ChatGPT等の使用は認めており、またそのことを前提とした授業を行う必要があると認識している。

◆大学進学について

- 日本医科大学への進学枠は今後も2名を維持するのか？
- 大学本部では進学枠の拡大を目指すような考えもあるようだが、優秀な理系の生徒が他大学に流出してしまうというジレンマがある。
- 医学部生のレベルについては大学による差があまりない。10名ぐらいが他大学医学部に進学するぐらいであれば問題ないのではないか。
- 現時点ではそれほど希望者者がいない。日本医科大学への推薦入学についても、年度によっては1名といった状況。
- 早稲田大学への進学の権利を放棄しなければならぬので、現在は希望者が少ないとと思われる。進学の権利を保持しつつ、他大学医学部を受験することを認めて良いのではないか。
- 慶應大学の附属校では医学部の併願を認めている。

◆初等部や中等部の設置について

- 本学院も初等部や中等部を設置すべきではないか。群馬では共愛学園が初等部を、東京農大二高が中等部を設置し人気を集めている。
- 高校から募集するメリット（中高一貫を避けた優秀な層を獲得できる）もあるので、定員の一部について中学から受け入れるという方法もあるのではないか。
- 佐久長聖高校は大宮から通う生徒もいる模様。軽井沢への移住者も増えている。○子供の教育のためであれば住所を移すこと厭わない保護者も多い。

◆部活動について

- スポーツで世界レベルの成績を上げた生徒や卒業生について、本庄早稲田駅等にお祝いの垂れ幕を出してはどうか。
- 本評価書に部活動を記載しても良いのではないか。

◆国際関連

- 海外との交流について、アジア圏だけではなく、欧米圏との交流はないのか。
- 一度アメリカの学校との交流を試みたが、時差の関係でうまくいかなかつた。
- フランスの名門校で日本の高校との交流に興味を持っている高校がある。

10.2.3 関係者評価会印象

今年度の関係者会議では、外部委員が事前に資料を読み込んでいただく時間を長く持つことを心掛けた。また、校長等で高校教育歴の長い小林委員、同じく高校教育経験豊富な徳増委員のご協力を今年も仰ぐことができ、例年には積極的かつ忌憚のない意見を伺うことができた。いただいた意見は今年度以降に活かしたいと考える。

11. 最後に

学校を構成する生徒・教職員・保護者にとって「良い学校」を作るためには、現状の良い点・悪い点を客観的に評価し、良い点を強化し、悪い点を謙虚に改めて行く姿勢が重要である。残念ながら、学校という社会は、一般企業と異なり、なかなか客観的な評価をすることが難しく、変革の努力をせずに既存の在り方を継承しても、特に不祥事等がなければなんとか事なく過ごす

ことができてしまう。

しかし、世界的にグローバル化が進み、教育内容や生徒・保護者の意識が多様化する中、それでは学校としてはたち行かなくなってしまう。**DEI** やハラスメントへの対応は、怠ると学校の姿勢が大きく疑われ、時によっては社会的批判に晒されてしまう。この間のコロナ禍は、これらを含め時代や環境の変化に対応できるかという、学校の底力が問われた出来事であった。

ここに改めて、周囲の声に謙虚に耳を傾け、生徒・保護者・教職員誰にとっても居心地が良く、そして高いレベルの教育が展開されるような学校づくりに活かしたいと思う所存である。

ご多忙中にもかかわらず長い本文をお読みいただき、ご意見をいただいた評価委員の方々にこの場を借りて、学校を代表し心よりお礼を申し上げます。ありがとうございました。